琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介研究ノート

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2008-10-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7428

芥川龍之介研究ノート

小澤　保博*

A Study of Note on Ryunosuke Akutagawa's Work

Ozawa Yasuhiro*

目　次

Ⅰ「奉教人の死」
Ⅱ「一塊の土」
Ⅲ「糸女覚え書」

Ⅰ「奉教人の死」

はしがき

「奉教人の死」（「三田文学」大正七年九月）は、あらゆる意味で芥川龍之介の代表作である。代表作である所以をこれから個別に考えて行く。「奉教人の死」が、芥川龍之介の代表作になった理由の第一は私見によれば、芥川龍之介没後直後に発表された志賀直哉「沓掛にて－芥川君のこと－」の以下の一文である。

「芥川君の『奉教人の死』の主人公が死んで見たら実は女だつたといふ事を何故最初から讀者に知らせて置かなかつたか、と云ふ事だつた。今は忘れたが、あれは三度讀者に思ひがけない想ひをさせるやうな筋だつたと思ふ。筋としては面白く、筋としてはいいと思ふが、作中の他の人物同様、讀者まで一緒に知らさずに置いて、仕舞ひで背負投げを食はすやり方は、讀者の鑑賞がその方へ引張られる為め、其所まで持つて行く筋道の骨折りが無駄になり、損だと思ふと私は云つた。」（「中央公論」昭和二年九月）

杉浦明平は、後進の著述家として若い頃芥川龍之介の文学に愛着を持ったが、中年になってから志賀直哉の文学に惹かれるようになったという意味の感想を寄せた。（極めて普遍的、一般的な傾向、感想である）しかし晩年になるにつれて芥川龍之介の文学の技巧に心惹かれるようになった趣旨の短文を故郷、渥美半島の平穏な生活から全国紙に寄せた事があった。木村毅より二年前に早大英文科を卒業した田中純は、芥川龍之介の文学的意義を自然主義文学の無技巧の世界に花開いた、技巧の美という認識を示した。

「こうした僕の印象には、その当時の既成作家、ことに自然主義派の末流作家が、ほとんど例外なく文学を知らず、なまけ者で、凡庸で、自己身辺の瑣末時をだらだらと書き流すしか能がなかったという事実に負うところが多い。」（「作家の顔」昭和三十年七月）

早稲田派の代表的作家であった田中純の芥川龍之介に対する評価に注目したい。「公論は敵讐より出に如かず」、死後の芥川龍之介に対する田中純の精一杯の文学的評価は、その技巧の冴に対してのものであった。芥川龍之介没後、三十年の月日の流れた後に敵讐から寄せられた賞賛、典拠、素材、構想について以下具体的に見ていく事にする。

志賀直哉は（「奉教人の死」について）「三度讀者に思ひがけない想ひをさせるやうな筋だつたと思ふ。」と言った。（『御主も許させ給へ。「しめおん」は、己が仕業もわきまへぬものでござる』『さすが親子の情あひは争はれぬものと見えた。（中略）火の中へはひつたぞよ』『おう、「ろおれ

* 国語教育教室

んぞ」は女ぢや。』)「奉教人の死（一)」

上記の引用の三箇所が、「奉教人の死」の主人公「ろおれんぞ」の作中で受ける三度の受難である。最初の『御主も許させ給へ。「しめおん」は、己が仕業もわきまへぬものでござる』は、言うまでも無く基督受難の時のイエスの言動を芥川龍之介が、私的に書き換えた箇所である。『父よ、彼らを赦し給へ。その爲す所を知らざればなり』(「ルカ傳」第二十三章三十四節)。作品は、一人の奉教人が三度の受難の末に天国に召され、後には一命を捨てて一つの生命を救出した行為のみが、人々の記憶に残った。

「奉教人の死」の作品構造について志賀直哉が、瑕瑾と考えた「三度讀者に思ひがけない思ひをさせるやうな筋」について指摘された芥川龍之介は、「藝術といふものが本統に分つてゐないんです」(「沓掛にて」) と答えた。後年、二十年後に志賀直哉は、太宰治「犯人」(「中央公論」昭和二十三年一月) について、対談「作家の態度」(「文藝」昭和二十三年六月、七月) で「あれは読んだ。あれはひどいな。あれは初めから落ちが判ってるんだ。こちらが知ってることを作者が知らないと思って、一生懸命書いている。」と発言することで後進の太宰治の反撃を受ける事になる。

「こしらへ物のほうが、日常生活の日記みたいな小説よりも、どれくらゐ骨が折れるものか、さうしてその割に所謂批評家たちの氣にいられぬといふことは、君も『クローディアスの日記』などで思ひ知つてゐる筈だ。」(「如是我聞」)

技巧の極地を行ったとされる「奉教人の死」は、志賀直哉によれば「芥川君の技巧上の缺點」(「沓掛にて」) があり、芥川龍之介自身それを認めたとおり流露感に乏しい作品である。その意味では、「奉教人の死」は、従来の作品とその創作手法を異にするわけではない。芥川龍之介の創作手法については、谷崎潤一郎が自身の「蘆刈」終結部の創作に比して思い出を書き残している。

「芥川氏は前者の方であつたらしく、第一章は何處から何處まで、第二章は何處殼何處までと、執筆前にキツチリ決めてゐたとみえ、何處のチヤプターからでも書き出すことが出来ますと云つてゐたのを聞き、私は驚いたことがあつた。」(「雪後庵夜話」)

「奉教人の死」が、こうした従来の創作手法による作品成果であることは、確かである。しかし、「奉教人の死」には読者を酔わせる流露感がある。この事については、後年作者自身による自作自註がある。

「その小説の仕舞のところに、火事のことがある。(中略) ところが、書いてゐるうちに、その火事場の景色を思ひついてそれを書いてしまつた。」(「一つの作が出来上がるまで」大正九年三月)

作品後半部の火事場の場面は、思い付きと即興により成立した事が判明するが、これにより主人公の殉教の最期は劇的なものになった。火事場の精神的高揚と群衆心理が、娘に無理なく劇的告白を強いる事になり、作品構成上の破綻を免れた。この創作上の突然の感興は、明らかに半年前の「地獄変」(「大阪毎日・東京日日」大正七年五月) の芸術的感興を引きずっている。作品後半部の大部分を占める火焔場面が、「奉教人の死」創作時での作中の感興から生じたものである事は、以下の「ろおれんぞ」の「えけれしや」からの追放の場面から類推する事が出来る。

時しも凩にゆらぐ日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焔の中に、立ちきはまつたやうに見えたと申す。(「奉教人の死」)

創作時で作中の鮮烈な場面から、意識的、心理的に引きずられて「奉教人の死」の劇的な後半のカタストロヒィに流れ込んで行ったと考えられる。

理屈詰めで創作を成した芥川龍之介も「奉教人の死」後半部分については、谷崎潤一郎「蘆刈」創作時と同じ手法を駆使したわけである。理屈詰めの技巧の中で、時折見せる流露感に「奉教人の死」の文学的意義があると言える。流露感だけの書き流しの文章では、感興だけの思い付き感想文になってしまう。先に引用した早稲田派の代表的作家である田中純の自己批判とも取れる回想が思い出される。

「凡庸な生活の中に非凡な意義を見出そうというのは、自然主義文学のすぐれた提唱であったけれども、作家自身の才能がこれほど低劣になりさがっては、非凡な意義もクソもなかった。」(「秀才芥川龍之介」昭和三十年七月)

1

最初に「奉教人の死」の作品構成上の問題点、志賀直哉が指摘した「三度讀者に思ひがけない想ひをさせるやうな筋」について考察していきたい。「奉教人の死」の典拠は、現在入手容易な資料に拠れば「黄金伝説」（「人文書院」）所収「聖女マリナ」（「黄金伝説」七九）である。この典拠には「聖女マリナ」の男装の理由が、明確に示されている。「奉教人の死」が、無視したのは主人公のこの種の前身である。

去んぬる頃、日本長崎の「さんた・るちや」と申す「えけれしや」（寺院）に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がござつた。（中略）その女の一生は、この外に何一つ、知られなんだげに聞き及んだ。なれどそれが、何事でござらうぞ。（「奉教人の死」一）

作品冒頭からの男装の少年「ろおれんぞ」の突然の登場は、作品終結部での作者の芸術的感想を引き立てる為、必然の仮装であった。作中の主人公「ろおれんぞ」が、男装の少年としてその生を終わる事で作品末尾の作者の個人的感想を生かしているのである。「ろおれんぞ」は、作品終結部の作者の思想を完璧なさしむ為、終始一貫男装の少年としての人生を生きる事を強いられているのである。

されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。（「奉教人の死」一）

主人公「ろおれんぞ」の劇的人生を演出するために、男装の必然性はあったと考えるべきである。偉丈夫「しめおん」との親密な交際は、そしてその亀裂は受難者「ろおれんぞ」の人生をイエスの受難に重ねるべく作者により技巧的に工夫されている。

中でもこの国の「いるまん」に「しめおん」と申したは、「ろおれんぞ」を弟のやうにもてなし、「えけれしや」の出入りにも、必仲よう手を組み合せて居つた。（「奉教人の死」一）

男装の「ろおれんぞ」と偉丈夫「しめおん」との親密な交際が、「えけれしや」（寺院）内部で衆人の注目を浴びる事で、作品全体はエロスの雰囲気を帯び、神秘的色彩に彩られる事になった。この二人の「いるまん」衆（法兄弟）公認の親密な交際の亀裂により、「ろおれんぞ」の最初の試練が訪れるのである。

空を仰ぎながら、「御主も許させ給へ。「しめおん」は、己が仕業もわきまへぬものでござる」と、わななく声で祈つたと申す事ぢや。（「奉教人の死」一）

「ろおれんぞ」と「しめおん」の二人の関係が、同性愛的な色彩に彩られていることが、この技巧的作品にエロスの匂いを与えている。然るべき典拠なくして作品完成を為しえなかった芥川龍之介ではあるが、二人の奉教人の創作と禁色の愛の演出には作者の独断場の感がある。この時期に「澄江堂」のサロンに集った年少の文学青年を相互に競い合わせ、文学的精進を計り、自身の愛情の渇きを癒した作者の横顔を彷彿させる。

『私はお主にさへ、嘘をつきさうな人間に見えるさうな』（中略）『私が悪かつた。許して下されい』（「奉教人の死」一）

これは「いるまん」衆（法兄弟）の一人「傘張の娘」との密通を咎められた「ろおれんぞ」の「しめおん」に対する弁解の言辞であるが、幾分かは「澄江堂」での文学仲間との会話を偲ばせるものがある。論理を飛躍させれば、この時期芥川龍之介は、龍門の四天王の一人瀧井孝作の自身の下を離れ志賀直哉の影響圏に去るのを黙認した。あるいは小穴隆一、力石平蔵、渡辺庫輔等年少の友人との関係をより親密にした。狭い宗教集団内部での禁断の愛を巡る心理的駆け引き、「いるまん」衆（法兄弟）から放逐され「ぜんちよ」（異教徒）として排除される物語構成には、幾分かは上記の芥川龍之介の私的な体験の反映があるであろう。

「奉教人の死」について志賀直哉が指摘した二度目の「思ひがけない想ひ」とは、「ろおれんぞ」のイエスの愛の実践を周囲の「いるまん」衆（法兄弟）が、骨肉の愛と誤解する場面である。

『さすが親子の情あひは争はれぬものと見えた。己が身の罪を恥ぢて、このあたりへは影も見せなんだ「ろおれんぞ」が、今こそ一人子の命を救はうとて、火の中へはいつたぞよ』（「奉教人の死」一）

炎に包まれた「傘張の娘」の周囲に集った「いるまん」衆（法兄弟）のこの発言は、二重の誤解、

錯誤により発せられた発言である。自らは奉教人としてイエスの愛の実践により党派としての結束で結び付き「ろおれんぞ」を「ぜんちよ」（異教徒）として排除、「えけれしや」（寺院）から追放する事で生活の糧を奪った奉教人衆が、「ぜんちよ」（異教徒）の血肉の愛を嘲笑する場面である。（芥川龍之介は、「奉教人の死」作中で「えけれしや」（寺院）を修道院と取り違えて記述している箇所があるようだ。）

『わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ』（中略）『視よ、これは我が母、わが兄弟なり。誰にても天にいます我が父の御意をおこなふ者は、即ち我が兄弟、わが姉妹、わが母なり』（「マタイ傳」第十二章第四十八節～第五十節）

「いるまん」衆（法兄弟）とは、イエスの愛の実践の内部から血肉の家庭を離脱して「えけれしや」（寺院）を拠点として信仰の家庭を築いた集団であり、骨肉の愛を捨てた宗教集団である。「ろおれんぞ」が、誤解を経て最終的にイエスの愛の実践者、真の奉教人であることが判明する。この辺の記述には、福音書を拠り所とする信仰集団に対する芥川龍之介の蔑視がある。

志賀直哉の指摘した三度目の「思ひがけない想ひ」とは、言うまでもなく「奉教人の死」の作品末尾の劇的高揚の場面、「ろおれんぞ」の正体が白日の下に晒される場面である。

見られい。猛火を後にして、垣のやうに佇んでゐる奉教人衆、邪淫の戒を破つたに由つて『さんた・るちや』を逐はれた『ろおれんぞ』は、傘張の娘と同じ、眼なざしのあでやかなこの国の女ぢや。まことにその刹那の尊い恐しさは、あたかも『でうす』の御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝はつて来るやうであつたと申す。（「奉教人の死」一）

後半部分の引用により奉教人「ろおれんぞ」の殉教が、十字架上のイエスの最期に重なる。研究史的考察によれば、「奉教人の死」はイエスの信仰に接近した「西方の人」以前の作品、芥川龍之介による福音書のイエスの殉教、宗教的感動の再現である。

殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。（「西方の人」1 この人を見よ）

信仰に何ら接近する事のない時期の作品として位置づけられているが、芸術的感動を宗教的感動に引き上げた作品として、信仰に接近した最晩年の作品「西方の人」に比類する作者の魂の琴線に触れた作品として評価し得る。その意味で志賀直哉の云う「主人公が死んで見たら実は女だつたといふ事を何故最初から讀者に知らせて置かなかつたか」（「沓掛にて」）、という註文は論外であり、作品の芸術的完成を破壊する行為である。この志賀直哉の註文に対して、「藝術といふものが本統に分つてゐないんです」と返答したのは、芥川龍之介の不幸である。志賀直哉の言を受け入れ、晩年の芥川龍之介が物語上の技巧を捨てたのは更なる不幸である。

2

「奉教人の死」の典拠については、「黄金伝説」所収（「聖女マリナ」）と確定したらしいが、「黄金伝説」（七九）には、以下の説明文が掲載されている。

乙女が男装して修道士になりすまし、死後女であったことが発覚するという、いわゆる〈修道士処女〉の話は、もと東方起源のモチィーフらしいが、古代教会時代や中世の聖譚によく出てくる。聖女テオドラ（八七章）、聖女エウゲニア（一二八章）、聖女ペラギア（一四四章）、聖女マルガリタ（一四五章）の物語は、いずれもこの系列にぞくする。芥川龍之介の『奉教人の死』は、本章の物語を下敷きにしている。

「奉教人の死」（二）は、芥川龍之介が作品創作の素材としたと明言する典拠がもっともらしい作者の紹介文として掲載されている。作品典拠についての説明文、「奉教人の死」（二）は、二重の意味で作者の韜晦の意を秘めた文章である。

されど内容は必しも、西欧の所謂『黄金伝説』ならず。彼土の使徒聖人が言行を録すると共に、併せて本邦西教徒が勇猛精進の事蹟をも採録し、以て福音伝道の一助たらしめんとせしものの如し。（「奉教人の死」二）

作者はここで素材となったのが、「黄金伝説」ではないと言っている。語るに落ちるとはこの事で、多くの研究者の探求の結論は、今日「奉教人の死」の典拠が「黄金伝説」であることを明らかにしている。

「奉教人の死」の典拠について内田魯庵が、素早く言及したについては作品創作時からの行き掛かりのせいである。内田魯庵の芥川龍之介個人についての言及は、以下の通り希薄なものであった。

芥川龍之介氏は唯僕は一二回顔を合はしたに過ぎないので内面的には勿論外面的にも批評するだけの何等の予備知識がない。(内田魯庵「自由評論」昭和二年九月)

しかし、作品発表直後に「奉教人の死」(二)に対して素早く反応したのが、内田魯庵である事は、以下の芥川龍之介書簡から裏付ける事が出来る。

奉教人の死の『二』はね内田魯庵氏が手紙をくれたのは久米から御聞きでせう(「小島政二郎宛書簡」大正七年九月二十二日)

この時芥川龍之介は「奉教人の死」(二)が、虚構である事を明らかにした。後年も繰り返して「奉教人の死」(二)が、根拠のない出鱈目である事を繰り返した。

『奉教人の死』の方は、日本の聖教徒の逸事を仕組んだものであるが、全然自分の想像の作品である。(「風變りな作品二點に就て」大正十五年一月)

僕は黄金傳説を全部讀んでゐない。(第一全部は浩瀚だろう)が、Caxtonのセレクシヨンは一冊持つてゐる筈だ。(中略)二伸日本版『れげんだ・おうれあ』は今から七八年前に出てゐる。但し僕の頭でね。一笑(「秦豊吉宛書簡」昭和二年二月十六日)

作者は「奉教人の死」(二)は、「奉教人の死」(一)の典拠として虚構のものである事を繰り返して断言している。芥川龍之介のこの断言は、確かにある種の真実を伝えているであろう。「奉教人の死」(二)のもっともらしい作品典拠についての説明は、尽く出鱈目だろう。しかし芥川龍之介は、「奉教人の死」(一)の典拠の説明「奉教人の死」(二)において後学の為に有力な手掛かりを残しているのである。

予が所蔵に関る、長崎耶蘇会出版の一書、題して『れげんだ・おうれあ』と云ふ。蓋し、LEGENDAAUREAの意なり。されど内容は必しも、西欧の所謂『黄金伝説』ならず。(「奉教人の死」二)

作品典拠は、日本版「黄金伝説」である、西洋の流布している「黄金伝説」ではないと言っていっている。後進の研究成果は結論として今日、「奉教人の死」典拠を西洋の「黄金伝説」の一部である事を断定している。上記の事情は、芥川龍之介の作品素材について創作者としての誠実さを余すこと無く明らかにしている。作者は、作品中「奉教人の死」の典拠は、「黄金伝説」ではないとしてその出所を明確にしているからである。

この事に最初に気付いたのは、「奉教人の死」(二)について、具体的には「奉教人の死」(一)の典拠について直接芥川龍之介に書簡で問い合わせた内田魯庵である。内田魯庵「れげんだ・おうれあ」(「文藝春秋」昭和二年九月)がそれである。

3

先に私は、「奉教人の死」典拠として全四巻「黄金伝説」(「人文書院」)所収「聖女マリナ」(「黄金伝説」七九)について言及したが、「黄金伝説」(七九)は、芥川龍之介が「奉教人の死」典拠として実際に使用した「聖人伝」(「秀英社」明治二十七年刊)と比較するとかなり短い、つまり短縮版である。芥川龍之介旧蔵書として保管されている「聖人伝」(「聖マリナ」)は、粗筋は「黄金伝説」(七九)と同一ながら物語の展開は、きめ細かく分量的にも多い。芥川龍之介「奉教人の死」と典拠「聖人伝」(「聖マリナ」)とを比較した場合、当然の事として「奉教人の死」は、典拠、素材となった「聖マリナ」の倍以上の分量である。芥川龍之介旧蔵書「聖人伝」(「聖マリナ」)は、海老井英次編「鑑賞日本現代文学(11)」(「芥川龍之介」)に参考資料として収録されている。以下、「奉教人の死」と典拠「聖マリナ」)とを比較検討して芥川龍之介の創作の源泉に迫って見たい。

昔し亜弗利加の国に、ウゼノと称する人ありけり、妻との中に一女子ありて不足なく此世を暮らしつゝありしが、盈つれば欠くる世の習ひ夜半に嵐の吹かぬものかは、一年其妻は夫に先ちて葉末にをく露よりもろく此世を去りしかば(「聖マリナ」)

一読して明瞭なように典拠「聖マリナ」は、「奉教人の死」と比べて古色蒼然たる資料であり、近代的色彩に欠けている。「奉教人の死」の鮮や

かな、明瞭な色彩豊かな作品構造から比べて遜色がないとは言えない。これについては、三好行雄「作品論の試み」（「奉教人の死」）が同時代匿名批評を紹介している。

あんな美しい、近代的な完全な技巧があの時代にある筈がない。恐らく芥川氏が原文によつた創作であらう（「時事新報」大正七年九月六日）

当時にあっても「奉教人の死」（二）については、疑問視されていたのである。芥川龍之「奉教人の死」（二）が、内田魯庵に作品典拠の信憑性を信じさせた事が、後世多くの模倣者を生んだ。偽装の資料で読者を誘惑する手法で、芥川龍之介「奉教人の死」（二）は、その先駆的役割を果たした。谷崎潤一郎「春琴抄」（「中央公論」昭和八年六月）の作品構成は芥川龍之介「奉教人の死」（二）の先駆的作品なくして創作し得る事はなかったであろう。

近頃私の手に入れたものに『鵙屋春琴傳』といふ小冊子があり此れが私の春琴女を知るに至つた端緒であるが此の書は生漉きの和紙へ四号活字で印刷した三十枚程のもので察するところ春琴女の三回忌に弟子の検校が誰かに頼んで師の傳記を編ませ配り物にでもしたのであらう。（「春琴抄」）

谷崎潤一郎「春琴抄」の発想の典拠は、芥川龍之介「奉教人の死」（二）であると言えるだろう。文学上、芥川龍之介の血脈にあった松本清張は、創作において虚構の素材、典拠を頻繁に用いたが、明らかに「奉教人の死」（二）の影響である。

「奉教人の死」と典拠「聖マリナ」とを今日単純に比較してみると、芸術作品と宗教書との質の違いが明確である。「聖マリナ」では、彼女は「黄金伝説」の主人公、即ち聖人に列するために神の与えた試練に立たされる。そして、作中そのように明記されている。

悪魔はマリンの信仰厚きをいたく嫉み、神に乞ふて是に害を与んことを望めり、神も其信仰の度を試んが為めにこを赦せり此に於て悪魔はいたく悦喜し己が技量を尽してマリンに害を与へ初めたり。（中略）かゝる可憐なる乙女にかゝる苦難を与へても悪魔は尚飽き足れりとなさず、又々一の苦をぞ与へける。（「聖マリナ」）

長い忍従、誤解の生活の果てに、死後その人物の真価が判明して聖人に列せられ、つまりは「黄金伝説」の作中人物として死後の栄光を得るという物語展開である。平易に言い換えると民衆教科のための副読本、日本版「日本国現報善悪霊異記」の説話が、「黄金伝説」（「聖マリナ」）に比較し得る。

此マリンの不撓なる大忍耐をもて吾々が日々の行に比せば其差幾何ぞや、（中略）俗より雅に入るの子を守つて、然してことをとらば、遂には此マリンの如き大忍耐を成就して聖人の尊号を握ることを得べきなり。（「聖マリナ」）

「黄金伝説」（「聖マリナ」）は、「日本国現報善悪霊異記」がそうであるように、聖人の人生の足跡を紹介した後に、民衆教化のための励ましの言葉で終わるのである。「奉教人の死」典拠である「黄金伝説」（「聖マリナ」）を読み比べてみると、芸術作品としての「奉教人の死」の特徴は際立っている。

第一にそれは、作品主題の明瞭なる提示である。「奉教人の死」冒頭の二つのエピグラムの趣旨が、「奉教人の死」（一）の作品本体と首尾照応の関係を持ち、小説本体の趣旨は、作品冒頭の二つのエピグラムの主題に終始収斂され、物語の放漫に流れる事を阻止している。芥川龍之介の作品世界は、菊池寛のテーマ小説ほどには、作品主題は明瞭ではない。しかし、「奉教人の死」に限ってみれば、作品主題は明瞭である。

なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。闇夜の海にも譬へようず煩悩心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を、水沫の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。（「奉教人の死」一）

繰り返せば、作品本編のこの主題が、絶えず冒頭の二つのエピグラムと交互に照応しあっているのである。

「奉教人の死」がその典拠「聖マリナ」に比して際立っている特徴の第二は、前者の平板な描写とは比べようもない、色彩豊かな作者の描写力である。むしろこの第二の特徴に、平板な教訓的宗教書を基盤に、芸術作品の完成を記した芥川龍之介の作家的才能の発露を見るべきであろう。「奉教人の死」全編を通して印象的な、色彩豊かな、鮮やかな表現は私見によれば、芥川龍之介の年少

の頃からの文語訳「舊新約聖書」の読書体験の反映がある。

まことにその刹那の尊い恐しさは、あたかも『でうす』の御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝はつて来るやうであつたと申す。(「奉教人の死」一)

この場面の奉教人衆の驚きは、明らかに彼らの脳裏に刻まれた「最後の審判」の印象を芥川龍之介流に文章化した場面である。この事は、先に長崎の大火の場面、物語の最高潮において作者自身が、自ら「末期の御裁判」(「最期の審判」)の語を使っている事から自明の事として理解される。

あの大火事のあつた事ぢや。まことにその折の景色の凄じさは、末期の御裁判の喇叭の音が、一天の火の光をつんざいて、鳴り渡つたかと思はれるばかり、世にも身の毛のよだつものでござつた。(「奉教人の死」一)

4

「奉教人の死」冒頭には、二つのエピグラムが記載されている。このエピグラムが、「奉教人の死」(一)の作品構造を暗示し、さらに作品本編と微妙に交差して独特の物語世界に導いている事は多言を要さない。

たとひ三百年の齢を保ち、楽しみ身に余ると云ふとも、未来永劫の果しなき楽しみに比ぶれば、夢幻の如し。(－慶長訳Guia do Pecador－)

善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議の甘味を覚ゆべし。(－慶長訳Imitation Christi－)

河泰厚「芥川龍之介の基督教思想」(「殉教と棄教」)には、「奉教人の死」冒頭のエピグラムの出典に就いての研究史が紹介されている。それによれば、最初のエピグラムの一文は、記載の典拠通り「Guia do Pecador」(「勧善抄」)からそのまま引用したものである。但し、芥川龍之介は、新村出「南蛮記」所収の「切支丹版四種」(「勧善抄」)からそのまま引用した。二つ目のエピグラム「Imitation Christi」(「キリストにならいて」)、この原著は「Cotenmptus Mundi(コンテンツス・ムンヂ)」という名前で抄訳された。ただし芥川龍之介引用の一文「善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議の甘露を覚ゆべし。」は「Imitation Christi」に該当の一文はなくて、芥川龍之介による創作ではないかと言う。現在、トマス・ケンビス著「キリストにならいて」(「岩波文庫」)の全四章の目次を見た範囲では、芥川龍之介引用の「奉教人の死」冒頭のエピグラムと同趣旨の意訳の文章は、注意深く探せばありそうである。「キリストにならいて」は、著述の完成から百数十年後に抄訳で日本に紹介された。抄訳の「Cotenmptus Mundi」は、現在天草学林刊ローマ字本(「慶長元年刊」1596)、と京都原田アントニヨ印刷所刊国字本(「慶長十五年刊」1610)の二書があるそうである。芥川龍之介引用、二番目のエピグラムは先の新村出「南蛮記」になくて、「キリストにならいて」(「イミタシオネ・クリスティ」)の抄訳「コンテンツス・ムンヂ」の漢字平仮名交じりの国字本にも見出せないなら、英訳「Imitation Christi」から意訳して「善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議の甘露を覚ゆべし。」の文章を自分で創作した可能性もある。

「奉教人の死」の文体については、「文禄慶長の頃、天草や長崎で出た日本耶蘇會出版の諸書の文體に倣つて創作したものである。(中略)宗徒の手になつた當時の口語譯平家物語にならつた」(「風變りな作品二點に就て」)とあるように、新村出「南蛮記」所収「南蛮本平家物語抄」から示唆されたらしい。

三好行雄「作品論の試み」(「奉教人の死」)では、「南蛮本平家物語抄」と「奉教人の死」の双方の文章を引用して、芥川龍之介の文体の華麗さを推奨している。繰り返せば、「奉教人の死」は、その主題の明確な事で、さらには物語の展開における色彩の豊かさで群を抜いている。

むすび

「奉教人の死」(「三田文学」大正七年九月)執筆の翌年海軍機関学校退職後、芥川龍之介は最初の長崎探訪の旅に出る。同伴は菊池寛、長崎在住の永見徳太郎の世話になるわけだが、最初の長崎洋行を思い立たせたのは、前年執筆の「奉教人の死」創作である。新村出「南蛮記」等を作品創作のための素材、典拠として使用、親しんだ事が芥川龍之介に十日間に及ぶ当時としては、長旅を挙行させたわけである。

前掲、木村毅「芥川龍之介の思い出」には、生前芥川龍之介から貰った書間五、六通のうち遺失した芥川龍之介書簡についての言及がある。松崎実篇「切支丹鮮血遺書」（「改造社」）に関係して、二度の長崎滞在中の思い出を記述したものである。「天雲の光まぼしも日本の聖母の御寺今日見つるかも」（「大浦天主堂」）は、芥川龍之介の長崎市内観光体験の反映である。先に私は、「奉教人の死」において著者は、精神共同体としての教会と生活共同体としての修道会を同一視していると記述したが、作品執筆以前に大浦天主堂内を散策していたら明確な認識を持ったはずである。

主人公の居住空間については、本文中に見る限り「『えけれしや』（寺院）に、『ろおれんぞ』と申すこの国の少年がござつた。（中略）それより伴天連の憐みにて、寺中に養はれる事となつたげでござるが、」（「奉教人の死」一）、と記述の如くに「『さんた・るちや』と申す『えけれしや』（寺院）」に居住する事で生活を保障されている。彼は、奉教人衆から破門され、生活の伝手を失うのである。

伴天連の手もとをも追ひ払はれる事でござれば、糊口のよすがに困るのも目前ぢや。（中略）内陣に香炉をかざした昔とは打つて変つて、町はづれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食であつた。（「奉教人の死」一）

典拠「聖マリナ」では、マリナが身を寄せるのは、「行者会」とあって生活共同体である事が明確である。典拠「聖マリナ」に拠りながら、芥川龍之介は「ろおれんぞ」の生活の場を「えけれしや」（寺院）として精神共同体の場所にした。この時期芥川龍之介の認識が不足していたと言える。「奉教人の死」は、作品筋書きの細部を典拠「聖マリナ」によりながら、「ろおれんぞ」の生活の場を「えけれしや」（寺院）とした、あるいはこの箇所のみ別の典拠の一つ「サンタマリナの御作業」から借用したのか。

以下は、三好行雄「作品論の試み」（「奉教人の死」）が、「聖マリナ」を「奉教人の死」典拠と断定する根拠となった箇所の確認である。

町はづれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食であつた。（「奉教人の死」一）

かくて此を去りし后は淋しき野辺に家とは名のみ雨露を凌ぐにも足らざるあばらやを女子の手一つにて漸くしつらひ此所に入りて夜となく昼となく神に祷を捧げ道行く人の為にも祈りつゝ三度の食事も思ふまゝには食せず只命を保つばかりなるぞ哀れなる。（「聖マリナ」）

奉教人衆に破門された後の「ろおれんぞ」の居住については、典拠を忠実に借用しながら、典拠に記述されている「行者会」を見過ごした訣である。

「奉教人の死」の筋書きで、「ろおれんぞ」追放の最初の根拠となった「傘張の娘」との醜聞も典拠の記載箇所をなぞっている。

『娘は私に心を寄せましたげでござれど、私は文を貰うたばかり、とんと口を利いた事もござらぬ』（「奉教人の死」一）

娘はしばしば口説きけれども少しもマリンの従はざるを大に恨みいつか此恨を晴らすべしと考へ居ける。（「聖マリナ」）

三好行雄は、前記「奉教人の死」において、作品典拠「サンタマリナノ御作業」を耶蘇教叢書国字写本、邦訳ローマ字本聖者伝（「バレト稿本」）双方から冒頭部分を引用しているが、両者は基本的には同じである。両者は全四巻「黄金伝説」（「人文書院」）から派生した物語で、「聖人伝」（「秀英社」所収聖マリナ）と同じである。しかし「聖人伝」（「聖マリナ」）のみ上記に記載したように「奉教人の死」に近接した筋書きである。

典拠「聖マリナ」では、主人公の住居を「行者会」（「修道院」）、生活共同体と明白に記載しているのに「奉教人の死」では、「日本長崎の『さんた・るちや』と申す『えけれしや』（寺院）」（「奉教人の死」一）と作者が記載したのは、国字写本「サンタマリナノ御作業」記載の「寺」に無意識に引きずられた結果であるという意見がある。作者にはこの時期、精神共同体である教会と生活共同体である修道会の違いに対する認識は、無かったと思う。

芥川龍之介は、「『奉教人の死』の方は、「其宗徒の手になつた當時の口語譯平家物語にならつたものであり、」（「風變りな作品二点に就て」）と述べている事から、「奉教人の死」の文体が新村出「南蛮記」所収、「口語訳平家物語」に倣ったものである事が今日判明している。安田保雄「比較文

学論考続篇」（「芥川龍之介と切支丹」）には、芥川龍之介が「口語訳平家物語」に倣い、室町時代の口語を取り入れた「奉教人の死」の該当箇所を指摘している。一例を挙げ、室町時代口語の謙譲動詞「ござる」「おぢやる」の使用例を以下示すと、「この国の少年がござつた」「妾につらかつた口惜しさを思ひ知らさうと致いたのでおじやる。」（「奉教人の死」一）

「忠盛といふ人は文武二道の人でござつた。」「なぜにおまいりあらぬぞ猫殿？これは木曽が晴れの合子でおぢやる。」（「南蛮本平家物語抄」）

安田保雄「芥川龍之介と切支丹」は、全部で八例を挙げているが七例は省略する。

「倣つたといつても、原文のやうに甘くは書けなかつた。あの閑古素朴な気持が出なかつた。（中略）書き上げてから、讀み返して見て、出来不出来から云へば、『きりしとほろ上人傳』の方が、いゝと思ふ。」（「風變りな作品二点に就て」）

この自作の二作についての芥川龍之介の個人的感想は、どうか。この時の作者の感想は、後まで持続したらしくて、半年後にも同じ意見を披露している。

尤も小生の南蠻小説などはいづれも余り上出来ならず、唯小生はきりしとほろ上人傳だけは或は今日でも讀むに足る乎と存じ居り候（「木村毅宛書簡」大正十五年五月三十日）

海軍機関学校勤務の傍ら芥川龍之介は、長崎を舞台に「黄金伝説」（「聖女マリナ」）を典拠に、「南蛮本平家物語抄」に倣い室町時代口語を現代に復活させ、自身の芸術観を作品に定着させた。「奉教人の死」執筆後、半年後の長崎洋行が充実したものになったのは、職場からの開放感以外、室町時代の切支丹についての自身のスタディが十分成されたからである。さながら十分なる研究、準備を成して「伊太利亜紀行」を成したゲーテの先例に倣った感がある。

その後、長崎の浦上の天主教會のラゲといふ僧侶に出合つたことがあつた。その際、ラゲさんと『きりしとほろ上人傳』の話を交した。（「風變りな作品二点に就て」

大浦天主堂を訪ね、ガラシー神父と〈小半日〉話し込む（「宮坂覚篇年譜」大正八年五月六日）

前掲「芥川龍之介の思い出」で、木村毅は上記のラゲ神父、ガラシー神父等との語らいについて記述した芥川書簡を遺失したと思い出を寄せている。「白樺派」の活動が、福音書の影響なくして考えられないように、芥川龍之介の二度の長崎洋行も当時隆盛を極めた南蛮、切支丹趣味の影響なくしてはあり得ない。二度の短期間の長崎滞在が、多くの文学的成果をもたらしたのは、新村出「南蛮記」等を事前にスタディして意を決して成された旅であったからである。

死期が近づいた芥川龍之介は、長崎から呼び寄せた渡辺庫輔、蒲原春夫、永見徳太郎等と私的に別れを告げ、光輝に満ちた長崎滞在中の記憶の整理を行った。永井徳太郎には、惜別の意を込めて「河童」の原稿を渡した（「昭和二年七月十五日」）。芥川龍之介の長崎滞在が、精神的にも充実したのは「奉教人の死」創作行為に見られるように南蛮、切支丹資料の私的な再構成の後に成されたからである。

長崎洋行での芥川龍之介の精神の充実は、今日「水虎晩帰之図」（「長崎市立博物館蔵」）において見る事が出来る。河童絵の中で、最高傑作と言われる銀屏風に描かれたこの作には、親しんだ長崎在住の芸者「照菊」（「杉本わか」）への賛が記載されている。不定期に展示されるこの河童絵を私は、まだ実見していない。いつかこの銀屏風の前に立って芥川龍之介の在りし日の精神の高揚を実験したい。

Ⅱ「一塊の土」

はしがき

「一塊の土」（「新潮」大正十三年一月）創作、発表については木村毅「芥川龍之介の思い出」に詳細な回想がある。この回想記を読むことで「一塊の土」のような作品が、何故芥川龍之介によって創作されたかその間の事情を知ることが出来る。

藤森成吉、加藤武雄、木村毅の三人が編集人となって「農民小説集」というのを編むことになった。（中略）芥川にあたってみると、意外にもよろこんで「一塊の土」というのをくれた。菊池寛は「義民甚兵衛」をくれた。（木村毅「芥川龍之介の思い出」）

芥川龍之介「一塊の土」は、菊池寛「義民甚兵衛」

（「中央公論」大正九年七月）と同じく既発表の自己の作品を「農民小説集」（「新潮」昭和二年六月）に転載したものである。菊池寛「義民甚兵衛」は、菊池寛の作品の中でも特異な作風であるが、それ以上に「一塊の土」は芥川龍之介作品の中で異色の作品である。「一塊の土」についての批評は、以下の正宗白鳥のそれが有名である。

「秋」には若い姉妹の心の動揺が巧みに描かれてゐる。ことに「一塊の土」はいゝ。「地獄変」と相並んで、この作者の全作品中で、最高位に立つものである。お民といふ田舎女の忍苦の生涯には、作者自身の心が動いてゐる。そして、自然主義系統の作家の作品に比べると、秩序整然として冗談がない。（「作家論二」創元社）

これは、おそらく芥川龍之介没後の執筆ではないかと思われるが、正宗白鳥には「一塊の土」執筆時における有名な同時代批評がある。これは、晩年の芥川龍之介を最高位に歓ばせたものである。「一塊の土」の正宗白鳥評価に小躍りして喜んだ芥川龍之介の自作に関する批評精神こそが、死後も彼の作品を不朽のものにしたと考えられる。

芥川龍之助君の『一塊の土』に心惹かれて、最初から読直した。熟読した。そして、感歎措く能はざるものがあつた。私の読んだ新年の数十篇の創作中では、これが最大の傑作である。芥川君の作中でも、これほど、力の籠つた、無駄のない、気取り気のない、奇想や美辞を弄した跡のない小説を私は一度も読んだことがない。読んだあとで広い人生に私は思及んだ。今までに私の知つてゐる芥川君の創作のうまさは、その作に書かれてあるだけのうまさであつた。この作では、私は作者のにほいを離れて人生を見詰めることが出来た。この絶好の短編に感歎したことを作者に伝へるために、この一文を草して文藝春秋へ送る。（一月十日夜）（「文藝春秋」大正十三年二月）

この正宗白鳥の絶賛に接した芥川龍之介の感激は、今日に至るまで残っている。第四次「新思潮」同人として、文学活動を始めた彼にとって久米正雄、松岡譲、成瀬正一等同人は、勿論菊池寛、さらには「鼻」（「新思潮創刊号」大正五年二月）に寄せた夏目漱石の絶賛の書簡（大正五年二月十九日）も真の評価とは、言い難い。仲間内の評価は、自画自賛と同じである。仲間内の賞賛など取るに足りない。「正論は敵讐より出に如かず」である。自作についてのこうした厳しい態度が、死後の芥川龍之介の文学的評価を確固としたものにしたのである。

冠省文藝春秋の御批評を拝見しました御厚意難有（ママ）く存じました十年前夏目先生に褒められた時以来最も嬉しく感じました（「正宗白鳥宛書簡」大正十三年二月十二日）

師の夏目漱石は、弟子筋の芥川龍之介宛に繰り返して文壇を相手にしてはいけないという趣旨の注意を与え、芥川龍之介自身同趣旨のことを周辺の後進に助言した。しかし芥川龍之介は、生涯に狭い文壇に囚われていて「何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すのではありません」（「夏目漱石書簡」大正五年八月二十四日）という夏目漱石の助言は、芥川龍之介の胸中には最終的に届かなかった。

なほ今後も何かの機会に拙作をお読み下され候節は、御遠慮なく悪作は悪作と御罵り下され度願上げ候。（「木村毅宛書簡」大正十四年八月二十八日）

自作に対する甘い批評に対しては、軽蔑を覚えるという趣旨である。帝国大学派の江口渙、岡栄一郎等の好意的批評などより、早稲田派の論客の評価のほうが嬉しいという芥川龍之介の自作に対する厳格な態度が、党派の内部に安住することを潔しとしなかったこの精神が、「新思潮」同人のなかにあって芥川龍之介の存在を別格のものとしたのである。

その大正十一二年以後の小説の中で、芥川の小説らしくない、と云いながら、評判のよかった、『一塊の土』と『トロッコ』は、さきに述べたように、他人の作品を焼き直した物であり、『庭』というちょっとした味のある小品は小穴から聞いた話を本にした物である。（宇野浩二「芥川龍之介」十八）

芥川龍之介「トロッコ」「一塊の土」「百合」の三作は、改造社の校正係湯河原出身の力石平蔵提供の原稿を素案として、作者が再構成した作品である。このことが世間に知られるようになったのは、戦後瀧井孝作「純潔―『藪の中』をめぐりて―」（「改造」昭和二十六年一月）においてである。こ

の瀧井孝作の戦後の回想文には、興味深い事実がいくつか記述されている。晩年の芥川龍之介の同伴者となった小穴隆一は、瀧井孝作の友人で「澄江堂」のサロンに連れて行ったのは、「龍門の四天王」の一人、瀧井孝作であること。俳句、篆刻、書等において芥川龍之介の先導者であった小澤碧童、遠藤古原草は二人とも小穴隆一の知人であったことだ。「餓鬼窟」に参集した「龍門の四天王」瀧井孝作、南部修太郎、小島政二郎、佐佐木茂索の存在は薄くなり、「澄江堂」のサロンの顔ぶれは、小穴隆一、小澤碧堂、遠藤古原草、力石平蔵、さらに長崎在住の永見徳太郎周辺の文学志望者、渡辺庫輔、蒲原春夫等若い世代に入れ替わっていることだ。

実母の愛を知らない芥川龍之介は、対人関係において距離のとり方を知らなかった。「人たらし」というのは、戦国の世を駆け抜ける木下藤吉郎を呼称した司馬遼太郎の造語であるが、芥川龍之介は周辺の人間に対して過剰な愛を求めて彷徨した。

七年程前、浅草の活動小屋で初めて芥川君を見た。瀧井孝作君と一緒に来てゐて、私は二間程離れた所に一人で居た。(志賀直哉「沓掛にて」)

志賀直哉門下の瀧井孝作は、最初芥川龍之介周辺の存在であった。瀧井孝作が芥川龍之介の下を離れ、志賀直哉門下になった事の微妙な事情を瀧井孝作のの回想は、暗黙裡に明らかにしている。

男女を問わず気を許した周辺の者に過剰な愛を求め続け、迷惑をかけ続けた芥川龍之介の異常な求愛の姿は、母の不在による魂の彷徨の哀れな姿として友人の記憶に残っている。

芥川龍之介、江口渙、久米正雄、菊池寛、小島政二郎等が上野清凌亭で佐多稲子の給仕で会食したおりの記憶を江口渙が回想として「わが文学半世紀」に記録に残したものである。

自分一人だけが誰からも愛されたい、そして、誰よりも一ばん多く愛されたいというような甘さ。一脈の弱さをもった愛情の上でのエゴイズム。(中略) このような弱点をもつ芥川が気の毒にさえもなったのである。(「その頃の芥川龍之介」五)

これは、当時十代の少女である佐多稲子の愛を独占したい芥川龍之介の横顔を江口渙が、垣間見て記述した箇所であるが、芥川龍之介の愛を周辺の者に絶えず求め続け、愛情に関して距離の取り方を知らない、彷徨する魂の持ち主としての芥川龍之介の記憶である。この芥川龍之介の精神の脆さ、危うさ、心の拠り所のなさについては、久米正雄もこれを是認して江口渙に漏らした感想が、「わが文学半世紀」(作者の言葉) に記録されている。

だって、君。芥川がじつによく出ているそうじゃないか。あの男のあのへんなところが・・・・それで、あれはあっちこっちで評判だね。(「作者の言葉」)

瀧井孝作「純潔―『藪の中』をめぐりてー」に再度立ち戻って考えると、芥川龍之介没後二十年が経過した戦後になって、暴露的な内容の回想をこの時期に瀧井孝作が書き残したのには理由がある。黒澤明監督、映画「羅生門」がヴェネチア国際映画祭でグランプリを獲得して、芥川龍之介「藪の中」が世界的に脚光を浴びたからである。映画「羅生門」の原案「藪の中」は、最初自分の創作原案であったと瀧井孝作は言っている。「藪の中」の典拠は、「今昔物語」(巻二十九「妻を具して丹波の国に行く男、大江山にして縛られたる語」第二十三) であるが、この説話を典拠にして瀧井孝作が模索した作品は「無限抱擁」と主題を同じくしている。純潔の失われた妻のその後を夫の側から描くのに「今昔物語」(巻二十九第二十三) を典拠とする作品として再構成しようとしたのである。

瀧井孝作「夫の貞操」(「新潮」大正十年十二月) は、妻に対する夫の貞操を主題としたものだが、これは芥川龍之介「藪の中」(「新潮」大正十一年一月) の発表より一ヶ月早い。瀧井孝作から小説主題の話題提供を受けた芥川龍之介が「藪の中」擱筆後に「澄江堂」のサロンで交わした会話のやり取りが、瀧井孝作の前掲回想に記述されている。

「君が前に話した材料、僕もこんど小説に作ってみたが、『藪の中』という題にして、新潮に出したョ」と言われ「君の言ったのと大分ちがえたが、まあ読んでくれたまえ」ということでした。(中略) 芥川さんは頬笑んだようでした。

この辺の記述は「龍門の四天王」瀧井孝作が、「澄江堂」のサロンから離れ、志賀直哉の門下になった事情を暗黙裡に語っているようである。こ

の時期瀧井孝作は、室生犀星旧宅、市外滝野川田端五七一に転居（大正十年五月）、一年後に千葉県我孫子に転居（大正十一年四月）して芥川龍之介の影響下を離れ、事実上志賀直哉門下となる。

前掲瀧井孝作の回想文には続いて次のような貴重な証言がある。

その湯河原から出て某社の校正係といわれる力石青年は、控目なおとなしい人で、その時分、澄江堂連中の一人でした。また、十三年一月に出た百姓女を描いた秀作『一塊の土』も、湯河原生れの力石君の協力した材料のようでした。この青年とは何か格別の間柄があったのでしょう。ふかい親し味があったからこその材料を採り上げて制作されたわけで。

「龍門の四天王」瀧井孝作のこの時期の発言内容は、意味深長なものがあって芥川龍之介の「澄江堂」サロンを取り囲む顔ぶれの変遷について、瀧井孝作の心情の屈折を感じさせる。瀧井孝作が志賀直哉門下になった時期、佐佐木茂索は菊池寛の下で「文藝春秋」の編集に携わるようになり、南部修太郎は人妻秀ひで子を芥川龍之介から奪って「龍門の四天王」から離脱している。

このような小穴隆一君は、芥川さんから、初対面の日に、もはやぞっこん惚れられて、私は嫉妬をおぼえたくらいでした。（「純潔」一）

無邪気な性格の小穴隆一を「澄江堂」サロンに誘ったために飛騨出身の無骨な田舎者、瀧井孝作は芥川龍之介の寵愛を奪われてしまったわけである。瀧井孝作「純潔」（「改造」昭和二十六年一月）の記事を頼りに、「一塊の土」の素材提供者力石平蔵についての調査が今日石井茂によってなされている。「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」（「日本文学」一九八〇年十一月）「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」（「湯河原と文学」一九八四年三月）、後者は前者の緻密な調査報告を一般的に書き改めたものである。

筆者は昭和五十五年六月一日、八十六歳の高齢でなお健在である瀧井氏を、八王子市子安町の自宅にたずね、この記述を中心に話し合ってみたが、話題はこの記述の範囲を一歩も出ることがなかった。しかも面識は一度ぐらいで、その名前をすら知らなかった。そこで、その名は『平蔵』と言い、作家志望の青年で、次に述べるように一篇の当選小説を『文藝春秋』に残している旨を話したところ、明らかに驚きの色を示された。（「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」二）

前掲論文「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」には、力石平蔵未亡人の回想で二人の公私混同の一心同体の関係が、伯母芥川フキの嫉妬心を煽ったことや家庭を顧みずに芥川龍之介と生活を共にした夫、力石平蔵に対する夫人の側からの不満を記述している。湯河原中西屋旅館で静養中（大正十年十月一日～二十日）、南部修太郎、小穴隆一、小澤碧童等同伴で力石平蔵も終始行動を共にしている。芥川龍之介と力石平蔵の関係は、小穴隆一との関係がそうであったように幾分同性愛の臭いがある。鵠沼の東屋旅館に滞在中（大正十五年四月二十二日～翌年一月）も力石平蔵が、芥川龍之介と行動をともにして一心同体であったことを、今日芥川夫人の回想により知ることが出来る。

主人はその時、腸をこわしていたので、気になりましたが、ちょうどその時、農家の人ですが、文学好きな力石平三さんという方が訪ねて来られたので、力石さんに泊って頂くようにお願いして、私は東京へ帰りました。（芥川フミ「追想芥川龍之介」三十一）

既に知られているようにこの力石平蔵提供の草案原稿を基に創作された芥川龍之介の作品は、「トロッコ」（「大観」大正十一年三月）「百合」（「新潮」大正十一年十月）「一塊の土」（「新潮」大正十三年一月）の三作である。三好行雄「『一塊の土』をめぐって」（「三好行雄著作集第三巻」筑摩書房）には、日本近代文学館所蔵の力石平蔵「二本芽の百合」の原稿の部分的紹介がある。これが、芥川龍之介「百合」の草案原稿である。「トロッコ」「一塊の土」創作の基になった力石平蔵提供の草案原稿は、存在しないようだ。しかし今日力石平蔵提供の草案原稿を芥川龍之介「トロッコ」「一塊の土」から類推することは、可能だ。

「二本芽の百合」と「百合」の比較検討を試みた三好行雄「日本近代文学館月報」からの類推、さらには前掲石井茂の二つの論文「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」「芥川龍之介と吉浜の平蔵人力石」から、力石平蔵提供「トロッコ」「一塊の土」の草案原稿の大体を憶測することが可能で

ある。

今年七歳の良平は生まれた家の台所に早い午飯を掻きこんでゐた。すると隣の金三が汗ばんだ顔を光らせながら、何か大事件でも起つたやうにいきなり流し元へ飛びこんで来た。『今ね。良ちやん。今ね、二本芽の百合を見つけて来たぜ。』金三は二本芽を表はす為に、上を向いた鼻の先へ両手の人さし指を揃へて見せた。(「百合」)

「おい、林ちやん」林平がひとりで、まだ早い午飯を食べてゐると、隣の金次が、突然裏口から入つて来て、大きい声で呼び掛けた。そしてすぐ、汗ばんだ顔を微笑ませて、「わしは今ね、二本芽の百合を見付けて来たよ！」と言いながら、両手の人差し指を鼻先へ揃へて見せた。(「二本芽の百合」)

『ね、おい、良ちやん。今直見にあゆびよう。』金三は狡るさうに母の方を見てから、そつと良平の裾を引いた。(「百合」)

金次は、広間の方へ眼を向けながら、低声で、「今すぐ、見にあいびよう」と林平の裾を引いた。(「二本芽の百合」)

原稿用紙十六枚の「二本芽の百合」、力石平蔵提供の草案原稿は二本に分かれる新芽の百合の成長に心ときめく田舎の少年の素朴な、春を迎える喜びを作文的に綴ったものである。東京に生まれ育った芥川龍之介には、無縁な世界である。冬から春へ、田舎の少年の季節の移り変わりに心も体も一喜一憂する少年の心境の推移を鮮やかに把握する視線を芥川龍之介は、理解することが出来なかった。それが「百合」が未完に終わった理由であると三好行雄「『一塊の土』をめぐって」に説明されている。「百合」が、未完に終わることで力石平蔵「二本芽の百合」草案原稿も破棄される事なく残ったのであろう。「トロッコ」「一塊の土」が、作品として完成されたことで力石平蔵提供の草案原稿は、芥川龍之介自身の手で破棄されたのであろう。芥川龍之介没後、力石平蔵の痕跡が消えてしまったことについては、この辺の事情も幾分かは与っているかも知れない。三好行雄は、力石平蔵について「気にはしながらまだ未調査である。示教に俟ちたいと思うが」(「『一塊の土』をめぐって」)と述べているが、素材提供者力石平蔵につては、前掲石井茂の一連の調査で解決を見たわけである。

力石平蔵についてその人物像については、芥川龍之介書簡からその輪郭を窺い知る事が出来る。「正直にして善良なる事は小生の保証する所なり。」(「山口貞亮宛書簡」大正十一年三月二十二日)「但し甚だ善良なる田舎者であります」(「黒須康之介宛書簡」大正十二年四月二十七日)、これら芥川龍之介書簡を裏付けるかのように前掲の回想で瀧井孝作は次のように述べた。「その湯河原から出て某社の校正係といわれる力石青年は、控目なおとなしい人で、その時分、澄江堂連中の一人でした。(中略)この青年とは何か格別の間柄があったのでしょう。ふかい親し味があったからこそその材料を採り上げて制作されたわけで。」(「純潔－『藪の中』をめぐりて－」)、龍門の四天王の一人、芥川龍之介の下を去って志賀直哉門下として後半生を過ごした瀧井孝作の記述には、微妙なかげりがある。周知のように瀧井孝作は、無骨な風貌である。力石平蔵と芥川龍之介の親密な関係について前掲の石井茂も「瀧井氏に『格別の間柄』の内容をたずねたが記憶も関心もうすれていて期待はむなしかった。リンさんのことばの前記『伯母さんから妬まれ・・・・・・・』などから、何となく同性愛に近い関係があったかのように、私には感じられるのである。」(「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」)と述べた。力石平蔵についての瀧井孝作の微妙な言い回しから、石井茂との対談での瀧井孝作の発言「記憶も関心もうすれていて」というのは、対談時八十六歳の作家瀧井孝作の韜晦の横顔ではないか。

芥川龍之介と親交のあった作家、教授たちは、皆消えてしまって全ては文学史上の人物になってしまったが、ここで私はあまりに個人的な思い出を記録に残しておきたい。芥川龍之介に遅れる事十年、第一高等学校、東京帝国大学に学び晩年の芥川龍之介の「澄江堂」のサロンの一人であった高名なドイツ文学者に大学院進学の折、私は推薦状を書いてもらったことがある。教授は、怠惰な一学生である私のために懇切丁寧、過分なる推薦状を認めてくれたが、芥川龍之介の個人的な思い出を聞き出そうとする当時二十三歳の私を前にして七十歳の高名な教授は、明らかに不快な表情を

見せたのである。若い学生の無遠慮な突然の質問に、半世紀以前の「澄江堂」サロンの空気を思い出したように私には、思えた。教授は、身のこなしは優雅であったが、大柄な無骨な風貌であった。

前掲の瀧井孝作の回想には、芥川龍之介「トロッコ」の草案原稿についての貴重な発言がある。「力石君から貰受けた五、六枚の原稿で、書改めたのだが」(「純潔」一)、これについて「トロッコ」創作過程の考察で西垣勤は、「しかしその記憶さえも、年毎に薄れるらしい」(「トロッコ」)までが力石平蔵提供の「トロッコ」草案原稿であろうと推定している。(実践国語研究所収「トロッコ」論)、「百合」「トロッコ」二作品については、力石平蔵提供の草案原稿について以上で多少把握しえたが、「一塊の土」についてこれから考察するについて力石平蔵提供の草案原稿について憶測し得る手掛かりはないか。

石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」には、著者が力石平蔵未亡人からの聞き書きから探索し、探し出してきた力石平蔵「父と子と」(「文藝春秋」大正十五年二月号)の梗概が紹介されている。田舎青年の素朴な生活を即物的に、作文的に書き進める筆致から「一塊の土」草案原稿を類推することは、可能だ。

芥川龍之介の湯河原中西屋旅館滞在は、全部で三回(「大正十年十月一日～十月二十日」「大正十二年三月十六日～四月中旬」「大正十五年一月十五日～二月十九日」)、この間力石平蔵は終始一貫芥川龍之介と行動を共にした。「その逗留期間中は、家をあけてほとんど中西に入りびたりであったと、リンさんは今も不服そうな表情で語る。」(石井茂「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」)、中西屋から帰京後(大正十五年二月十九日)も養生のため夫人の実家のある鵠沼海岸、東屋旅館に滞在中(大正十五年四月下旬)ここでも力石平蔵が生活を共にした事は、先に引用した夫人の回想(芥川フミ「追想芥川龍之介」)にある。「田端の芥川家で女中を必要とした場合、実妹のつる・ミヤの外、村の女二人までも女中に世話したり」(石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」)、これほどに公私共に一体となって生活を共にした力石平蔵の存在は、芥川龍之介の生前、あるいは死後どのように消えたのか。「リンさんや嗣子静夫氏に何か書き残した作品や反故はないかとたずねたところ、その死に臨んで本人の意思もあって二行李ほどの書物や作物をすべて焼き捨てて何もないとのことであった。」(石井茂「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」)

芥川龍之介の生前、長崎在住の永見徳太郎と周辺の文学志望の青年、渡辺庫輔、蒲原春夫等が上京したが、死を意識した芥川龍之介は何らかの形で別れを告げている。「同性愛に近い関係があった」と後年憶測される、力石平蔵はどのような形で生前の芥川龍之介と別れたのか。中国で買ってきた布で夫人が縫い上げた浴衣を着て、遺骸となって横たわる芥川龍之介に生前の力石平蔵は、対面したのであろうか。芥川龍之介の周辺から、あるいは文学世界から完全離脱し、石井茂の調査対象になるまで無名のまま埋没していった人生が、全てを語っているようである。

力石平蔵は、石井茂に発掘されることになる唯一の小説「父と子と」(「文藝春秋」大正十五年三月号)だけを残して文壇から完全に消えたのである。石井茂は、力石平蔵「父と子と」の梗概を紹介した後に次のような論評を加えた。

> そこには父と子の関係にしぼり、他の一切の人間関係(夫と妻、母と子、男と女、他人と身うちなど)を排除して、その関係における信じ合い、思い合い、愛し合いなどの姿を克明に描いていて、しみじみとした純愛のにじんだ作品である。いかにも力石の育ちと体験と気質のこもった作品である。文章や展開もごく自然で静かで地味で無理がない。才気のひらめきもなければいや味やきざっぽさなどは毛頭もない。芥川の都会ふうに対し田舎ふうの一語に尽きよう。(石井茂「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」)

芥川龍之介「一塊の土」成立に寄与した力石平蔵提供の草案原稿が、いかなるものであったか今日それを知ることは出来ないが、力石平蔵が残した唯一の小説「父と子と」(「文藝春秋」大正十五年三月号)の梗概から大体の憶測は、可能である。以下、芥川龍之介「一塊の土」について具体的に見ていきたい。

1

松澤信祐「新時代の芥川龍之介」(「芥川とプロレタリア文学」四)に「一塊の土」について簡潔

な、要領を得た梗概があるので最初に紹介しておきたい。

倅の仁太郎に八年も寝こまれた後、死なれてしまったお住は、嫁のお民が実家に戻らず再婚もせず、幼い一人息子の広次と婚家に残って野良仕事を嫌わず働きつづける姿に安心し、感謝していた。が、「稼ぎ病」にとりつかれたお民が、田地をふやし、養蚕にも手を伸ばそうとして、家事一切の労働を年老いたお住に押しつけたために、しだいに不満をもつようになる。それは、「はやり切つた馬と同じ軛を背負された老馬の経験する苦しみだつた」。

広次が小学校の高学年になった年の夏、「丈夫自慢のお民は腸チブスに罹り」あっけなく死んでしまった。村では、お民を「貞女の鑑」として表彰するはずだったと残念がり、村長始め全員が会葬した。その夜、もう働かなくてもお民に「小言を云はれる心配」のなくなったお住は、「一生のうちこの位ほつとした覚えはなかつた」「孫は彼女のすぐ隣に多愛(ママ)のない寝顔を仰向けてゐた」。なかなか寝つかれなかったお住が眠りに入った時には、「この一家の茅屋根の空も冷やかに暁を迎へ出してゐた」。

この芥川龍之介「一塊の土」のモデルに関して詳細な報告が成された。石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」(「日本文学」一九八十年十一月）については、既に述べた。

松澤信祐「芥川とプロレタリア文学」には、「一塊の土」を社会主義文学として位置付けるために、プロレタリア文学についての芥川龍之介の発言を網羅して「一塊の土」との対比をしている。前記石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」(「湯河原と文学」四）と松澤信祐「芥川とプロレタリア文学」(「新時代の芥川龍之介」）から示唆を得て「一塊の土」の作品構造について見ていきたい。

良平は或雑誌社に校正の朱筆を握つてゐる。しかしそれは本意ではない。彼は少しの暇さへあれば翻訳のマルクスを耽読してゐる。或は太い指の先に一本のバットを楽しみながら、薄暗いロシアを夢みてゐる。(「百合」冒頭)

芥川龍之介「一塊の土」素材提供者であった力石平蔵が、政治的に左翼的傾向にあったことは事実で、創作面での社会主義の影響を力石平蔵から芥川龍之介が直接受けていた可能性はある。

左傾していたことは生き証人たちもひとしく認めるところである。が、この傾向の人とは思えない温厚で朴実で無欲で、のん気でお人好しの人物であったらしい。(石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」)

比較的早くから芥川龍之介は、友人恒藤恭の紹介で社会主義関係の書籍に親しんでいたが、左傾した身近な友人力石平蔵提供資料で書き上げた「一塊の土」は、従来自分が抱いていた社会主義思想を何らかの形で作品として具現化する意味合いもあったであろう。「一塊の土」執筆直後、二度の軽井沢滞在中芥川龍之介は集中的に社会科学の原書を読破している。「一塊の土」に結実した作品成果を社会主義の書物で理論的に再整理したいという意欲がこの種の読書にあったと思う。

前掲の木村毅「芥川龍之介の思い出」には、二年前最初の軽井沢滞在中集中的に社会主義の文献を読んだ研究成果の幾分かが披露されている。大正十五年「澄江堂」のサロンでその年創設された「日本労農党」の出版部長に推された木村毅に向かって芥川龍之介が語った発言が記録されている。

「君は、中間の無産政党の、何だか役員になったらしいが、革命でもおこったら、あぶないよ」(中略)「だから、日本に革命がおこっても僕は安全だが、君は殺されるよ」(木村毅「芥川龍之介の思い出」)

「農民小説集」に「一塊の土」が収録された事が喜びであったと木村毅は、この時の芥川龍之介の気持ちを忖度しているが、「正論は敵讐より出に如かず」で早稲田派の木村毅により「一塊の土」が、評価された事が嬉しかったのである。

2

「プロレタリア文學論」(「秋田魁新報」大正十三年十一月二日、四日)、これは「秋田魁新聞」(上、下）に二回に亙って掲載になったもので「ポーの片影」(上、下）と同じく森英一によって発掘されたものである。

ショオのものにはプロレタリアの生活が表向きに書かれてゐない。(中略）しかし彼の作品を目してプロレタリア文學といふかといへば、人物や生活はプロレタリアのそれでなくても背

後にブルヂヨア生活等の崩壊が暗示されてゐるからである。(「プロレタリア文學論」上)

さてプロレタリアの精神に味方したものに大体二通りあると思う。第一は宣伝を目的としたものと、第二に文藝を造る傍宣伝するものとがある。第二の部類にはショウの作など這入ると思ふ。(中略) 私の目にするところをもってすれば私たちの胸を打つプロレタリア文學なるものは未だ嘗て現れないやうであり、又同時にプロレタリア文學は誰の人によっても未だ形をもつに至らざる處女地のやうなものであると思ふ。(「プロレタリア文學論」下)

芥川龍之介「プロレタリア文學論」を要約すれば、社会主義国家建設のための目的意識に縛られている限り、作品成果は期待できない。バアナードショウオの作品が、優れているのは、現実社会の描写により来るべき革命についての予感を感じさせるからである。プロレタリア文学は、現状において文学的には見劣りしている。しかし、この方面の文学は、未開発であるにも関わらず可能性は、大である。個人的には、今後のプロレタリア文学に期待している。

「一塊の土」「プロレタリア文學論」を実作と理論の両面から考察するならば、どのような認識を得ることが可能だろうか。ここで再び芥川龍之介を奮起させた正宗白鳥の言葉を思い出す事は、意味のない事ではない。「芥川龍之助君の『一塊の土』に心惹かれて、最初から読直した。熟読した。そして、感歎措く能はざるものがあつた。」(「文藝春秋」大正十三年二月)

後年正宗白鳥は、芥川龍之介「一塊の土」について「自然主義系統の作家に比べると、秩序整然として冗談がない。」(「作家論 (二)」創元社) と評して、「一塊の土」が、文学作品として優れた水準にありながら、プロレタリア文学の先駆を成していると評価した。

「一塊の土」と一年後に執筆された「プロレタリア文學論」(上、下) との実作と理論との乖離は、あったかどうか。「背後にブルヂヨア生活等の崩壊が暗示されてゐる」(「プロレタリア文學論」上)「文芸を造る傍宣伝する」「私たちの胸を打つプロレタリア文學」(「プロレタリア文學論」下)、芥川龍之介の後者の二つの主張 (「プロレタリア文學論」下) については、「一塊の土」の実作は、目的を達成しているのではないか。正宗白鳥「作家論」(二) での絶賛がそれを証明しているように思える。

「一塊の土」執筆の一年前、芥川龍之介「プロレタリア文藝の可否を問ふ」(「改造」大正十二年二月、原題「あらゆる至上主義に好意と尊敬とを持つ」) が執筆された。

唯僕の望むところはプロレタリアたるとブルジュアたるとを問はず、精神の自由を失はざることなり。敵のエゴイズムを看破すると共に、味方のエゴイズムをも看破することなり。(「プロレタリア文藝の価値を問ふ」)

同時執筆で「所謂プロレタリア文学と其作家」(「新潮」大正十二年二月、原題「当に存在すべきものである」) も記述されている。芥川龍之介は、プロレタリア文芸が、政治の手段と化す危険について危惧の念を抱いていた事が分かる。文学が、人間の真実追及から遠ざかる事、政治手段に堕する事の危険について予見していた。宮本顕治「『敗北』の文学」(「改造」昭和四年八月) は、芥川龍之介死後、最初の代表的評論であるが、「プロレタリア文学の可否」でいち早く、芥川龍之介が予見した文藝の政治手段に堕する事の危険が実現したのである。「精神の自由を失はざること」「味方のエゴイズムをも看破すること」(前掲「プロレタリア文藝の可否」)、この時期芥川龍之介はプロレタリア文学の危険性、宮本顕治の登場を予見したのか。

第四次「新思潮」同人間の評価が、同一党派内部の仲間褒め、真の評価から遠いものである事を経験から認識し、そこから類推したのであろう。文学が政治体制を擁護するための手段になりやすい、あるいは表現の自由は簡単に失われる可能性がある。天才、巨匠、鬼才、才能に関するあらゆる賞賛は、同人仲間のそれは意味を成さない。党派内部の人格に関する賞賛も意味のない自画自賛である。繰り返すが、こうした厳しい姿勢が、芥川龍之介の作品と名前を不朽のものにしたのである。

「一塊の土」に「プロレタリア文藝の可否」で、芥川龍之介が展開して見せた理論の反映は、あるだろうか。「『お前さん働くのが厭になつたら、死

ぬより外はなえよ』」「『広、かう、起きろ。広、かう、起きて、お母さんの云ひ草を聞いてくよう。お母さんはおらに死ねつて云つてゐるぞ。(後略)』」(「一塊の土」)、家庭の外からは、理想的な嫁、姑の関係と見られながら、現実はエゴイズムのぶつかり合いにすぎない。この辺の記述に「味方のエゴイズムをも看破すること」(「プロレタリア文藝の可否」)という理論の反映があるかも知れない。

ちなみに「一塊の土」のこの辺の嫁、姑の険悪な関係こそ力石平蔵提供の「一塊の土」草案原稿から離脱した芥川龍之介の独創箇所であるという指摘がある。

そこには芥川の妻としての文子と、それを不断に抑圧し続けて芥川をして呪わしく懊悩させた姑同然の伯母フキとの微妙な対立関係から、かような抗争関係を筋立てしたものと思われる。(石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」)

芥川龍之介「プロレタリア文學論」(「秋田魁新報」大正十三年十一月二日、四日)は、結局一年前に執筆した「一塊の土」の実作に対する、芥川龍之介による理論的再構築の意味合いがある。「一塊の土」が、作品的成功を収めたという認識の下に、社会主義文学とはどうあるべきかにつて認識を示したのが「プロレタリア文學論」である。繰り返せば、文学作品は、教条的になってしまっては堕落である。文学作品として読者に対して芸術的感興を与えるものでなくてはならない。再度、「プロレタリア文學論」(上、下)から直接引用すると。

「ここではプロレタリア文學の悪口を言うのではない。これを弁護しようと思う。」(上)「いいものはいいのである。プロレタリア文學の完成を私は大いに期待するものである。」(下)

「一塊の土」の執筆の後、一年後に芥川龍之介にこの種の発言をさせたのは、言うまでもなく「一塊の土」発表の一ヵ月後に、発表された正宗白鳥「郷里にて」である。

私の読んだ新年の数十篇の創作中では、これが最大の傑作である。芥川君の作中でも、これほど、力の籠つた、無駄のない、気取り気のない、奇想や美辞を弄した跡のない小説を私は一度も読んだことがない。読んだあとで広い人生に私は思及んだ。(「文藝春秋」大正十三年二月)

台頭するプロレタリア文学の隆盛に対して慣れない素材から構成した作品、自己の素質からかけ離れた作品「一塊の土」に寄せられた敵側の陣営からの賞賛に力を得て、芥川龍之介は一年後に「これを弁護しようと思う。」(「プロレタリア文學論」冒頭)という発言をなしたと思えるのである。

3

先に「一塊の土」の梗概を紹介するのに、松澤信祐「新時代の芥川龍之介」(「芥川とプロレタリア文學」四)の記載のものを借用したが、「一塊の土」梗概の紹介の後に、作品のモデルについての詳細な報告をなした石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」の梗概も載っているので、以下これも借用したい。

モデルの小沢ラク(お民)は、足柄下郡下中村(現・二宮在)から、吉浜村(現・湯河原在)に二十三歳で嫁入り、四人の子を産み三十五歳で夫と死別、村では評判の仕事熱心ぶりであった。四十六歳の折、チブスにかかった次男の看病中、感染死した。モデルと作中人物はほぼ対応している。しかし、作品と事実との最も大きな違いは、葬式について、「小説では『嫁の手本』『今の世の貞女の鑑』として、雨天にもかかわらず『村のものは村長を始め、一人も残らず会葬した』という盛況ぶりと叙しているが、それを肯定する人は近親者には一人も」いなかったと、この論文は指摘し、「避病院で法廷伝染病患者として死んだ者の葬儀が、そんなに盛大である筈がな」く、小説的虚構であったと述べている。(「芥川とプロレタリア文學」四)

かつて三島由紀夫は、芥川龍之介「秋」について「この作品が一個の試作品に終つたのは惜しい。」(「南京の基督」解説)と述べたが、「一塊の土」についても同じことが言えるようだ。「一塊の土」に、他の芥川龍之介作品にない素朴な流露感があることについては正宗白鳥の指摘にあるとおりである。「芥川君の作中でも、これほど、力の籠つた、無駄のない、気取り気のない、奇想や美辞を弄した跡のない小説」(「作家論」二、創元社)とあるように力石平蔵提供の素材原稿の簡潔、素朴な写実的筆致を作品の背後に感じさせる。「一塊の土」が、「秋」と同じく一個の孤立した作品「位置づけのむずかしい作品」となったのは、作

品執筆が素材提供の原稿の再構成によってなされたことが大半の理由である。このことに就いては、作品発表と同時期の風評を宇野浩二が、残酷に記述している。

ところで、『一塊の土』が好評を博してゐた頃、誰いふとなく、「あれは芥川が書いたものではない、」といふ噂が立つた。しかし、もとより、噂であるから、それは、いつとなく、立ち消えになつた。（宇野浩二「芥川龍之介」二十）

しかし、「一塊の土」には、明らかに力石平蔵提供の草案原稿を一脱していると思える箇所もある。芥川龍之介が意図的に従来の高等的美意識を捨てた箇所でもある。「今の音はえ？ありやお前さん、牛の屁だわね。」（「一塊の土」）という会話である。かつて芥川龍之介は、「短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頬である。」（「羅生門」）という記述について後年自ら考証を展開したが、放屁については以下のような博学を示すことで、「一塊の土」の老婆二人の放屁の会話が意図的なものであることを伺わせている。

しかし屁をする描写のある小説にはまだ一度も出あつたことはない。出あつたことのないといふのは、西洋の小説にはと云ふ意味である。日本の小説にはない訣ではない。その一つは青木健作氏の何とかいふ女工の小説である。（「続野人生計事」一）

「帝国文学」編集委員として無名の芥川龍之介の「羅生門」を掲載した、この十歳年上の先輩に対しては、親しみと恩義を感じていたらしく「彷徨」（「新小説」大正二年一月）の一挿話をさり気なく紹介することで芥川龍之介は、無名時代の恩義に報いたのである。青木健作の息子の井本農一は、「芥川龍之介全集」（「角川書店」）月報に俳句を介しての亡父と芥川龍之介との親密な交際を回想している。

高踏派と看做される芥川龍之介の創作技巧に野卑な側面が、見出されるようになったのは、芥川龍之介の側からの芭蕉俳句の摂取の結果と思われる。松尾芭蕉「おくのほそ道」（「蚤虱馬の尿する枕もと」）に見られるように日常生活の俗な側面を芸術に高めた焦風の確立の過程に学んだ痕跡がある。

4

すでに私は、松澤信祐「新時代の芥川龍之介」（「芥川とプロレタリア文學」四）から、芥川龍之介「一塊の土」の梗概を、さらに同論文に紹介されている石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」の梗概も転載したが、前掲石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」には、力石平蔵未亡人からの聞き書きから示唆を得て著者が発掘してきた力石平蔵「父と子と」（「文藝春秋」大正十五年二月号）の梗概が記載されている。同じ内容の梗概が、「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」にも記載されている。ここでは後者の石井茂の文章を引用する。駆け落ちして行方不明になった息子は、残した父親の事が心配で便りを届けるが、父親の方では、その便りを手掛かりに息子を探し出す。

（前文略）良作は空別荘の留守番に入り、好きな植木の剪定などをして結構気楽に暮らしていたのである。由三はほっと安堵の胸をなでおろすと共に、子が親の手を離れ自立した時に味わう一種のむなしいさびしさを味わい、急に家や妻のことが恋しく思われてそこを早々に立ち去るのであった。（「力石の唯一の小説『父と子と』」）

力石平蔵「父と子と」の作中主人公の名前が「良作」ということに注意すべきである。この作品を国会図書館から調査発見してきた石井茂は、次のような感想を付け加えた。

そこには父と子の関係にしぼり、（中略）文章や展開もごく自然で静かで地味で無理がない。才気のひらめきもなければいや味やきざっぽさなどは毛頭もない。芥川の都会ふうに対し田舎ふうの一語に尽きよう。（「湯河原と文学」四）

はからずも芥川龍之介「トロツコ」について述べた室生犀星の印象批評と同じものになった。「此中には壮麗も見栄も気取りもない。」このように見てくると芥川龍之介「トロツコ」についての室生犀星の評価と力石平蔵「父と子と」に寄せた石井茂の感想は、同じである。さらにこれらは、芥川龍之介「一塊の土」に寄せた正宗白鳥の評価とも同じである。

力石平蔵「父と子と」は、互いに離反しあいながら根底では深く信頼しあっている父と子の関係を素朴に、他の人間関係を排除する事で簡潔な情

愛を示した作品である。父と子の相互の信頼関係を湯河原（「吉浜」）周辺の蜜柑畑の農村風景を背景にして素朴な筆致で描写した。芥川龍之介「トロツコ」は、吉浜周辺の蜜柑畑を舞台にして子と母の関係を素朴に描写した作品である。両作品は、表裏一体の関係にあることが分かる。

力石の生家は真鶴駅に近い旧道（東海道線の内側山沿いを走り、人事や軽便の道）から50メートルほど離れた字名を川堀という所にあり、そこからは、推定トロッコ道は大体登り坂が多いが、途中には茶店休息所を営んでいたという家も残り、登り詰めると相模湾を一望に見渡す眺めのすばらしい蜜柑畑もあり、「トロッコ」の描く行程に大体合致する。（「湯河原と文学」四）

「父と子と」「トロッコ」「一塊の土」も舞台は同一で湯河原（「吉浜」）周辺であり、作品構成に重なる箇所が見られる。「父と子と」とでは、父は息子の自立を確認し、安心すると同時に子供が、保護を必要しなくなった事を認識して一抹の寂しさを覚える。

「一塊の土」では、嫁のお民が再婚せず、子供のために働き続けることで姑のお住みは圧迫を受けてきたが、いざ嫁のお民に死なれてしまうと息子の仁太郎を長患いの後に亡くした時と同じ気落ちした気分になり、一抹の寂しさを覚える。作品人物のたどり着く落胆の気分は、「父と子と」と似ている。

むすび

芥川龍之介に「トロツコ」「百合」「一塊の土」の三作品の草案原稿を提供した後、力石平蔵の存在は消えてしまった。瀧井孝作「純潔―『藪の中』をめぐりてー」でその存在が明らかになった後、全貌が知られたのは石井茂「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」「湯河原と文学」（「芥川龍之介と吉浜の人力石平蔵」）等の一連の調査研究報告に拠ってである。

力石平蔵は、生前の芥川龍之介とはどのような別れをしたのであろうか。長崎在住、その後上京した渡辺蔵輔（与茂平）のような明瞭な別離はなかったのではないか。芥川夫人が裁縫した支那服を着用して遺骸となって横たわる龍之介に力石平蔵が対面する機会は、なかったのではないか。芥川龍之介の弟子は、堀辰雄と一般的に言われるが、堀辰雄の作った文学集団は、第一高等学校、東京帝国大学出身の知的集団である。芥川龍之介が持っていた学歴のない、無名の青年を引き立てる野生の息吹は、堀辰雄には継承されなかった。

芥川龍之介の持っていたある種の文学上の荒々しさは、川端康成に継承されたが、彼は菊池寛の弟子であり、芥川龍之介の弟子ではなかった。文学上の人間関係の不思議である。二人の妹と同じ村の二人を芥川家に女中として住まわせ、夫婦共に芥川龍之介と日々を送った力石平蔵は、父と自分との肉親間の情を「父と子と」に書き残し文壇から消えた。彼の隣家の子供との語らいは「百合」に、母への信頼は「トロツコ」に、そして父方の伯母の人生は「一塊の土」に、芥川龍之介により再構成され文学史に残る事になった。芥川龍之介の死後、力石平蔵の名前が文学世界から消えたことが、芥川龍之介自殺の衝撃が、彼には取り分け大きかった事を我々に知らせている。

芥川龍之介の死後に故郷に帰り、農業の傍ら現金収入を求め横浜の運輸会社に勤務し、著述や読書を避けて生きた彼の人生が、生前の芥川龍之介と力石平蔵との濃厚な人間関係を今日我々に暗黙裡に知らせてくれる。

Ⅲ「糸女覚え書」

はしがき

「糸女覚え書」（「中央公論」大正十三年一月）は、作風的には従来の芥川作品と何ら変わる事のない、変哲のない作品である。この時期に入江霜「霜女覚書」（正保五年筆記）を粉本として芥川龍之介「糸女覚え書」が、書かれた事については理由がある。中国視察旅行の後遺症のために帰国後湯河原にて静養の日々を過ごす。無聊の時間を過ごす為、気落ちした自己を奮い立たせるために徳富蘇峰「近世日本国民史」（「豊臣時代」三冊）を読んだ事から示唆を受けたのである。「金将軍」（「新小説」大正十三年二月）或は後年の「古千屋」（「サンデー毎日」昭和二年六月）も成立事情、典拠を同じくするであろう。「蘇峰の近世日本国民史豊臣時代三冊（合計九円）至急お送り下され度候。」（「芥川道章宛書簡」大正十五年一月二十一

日)、「唯徳富蘇峰の織田時代史や豊臣時代史を読んで人工的に勇気を振ひ起してゐる次第」(「片山広子宛書簡」大正十五年二月八日)とあるように蘇峰「近世日本国民史」を集中的に読んだのは、三度目の最後の湯河原滞在中である。

「近世日本国民史」(「徳川家康」一)には、「糸女覚え書」の典拠「霜女覚え書」全文と切支丹資料「日本西教史」、「藩譜採要」の一部が転載されている。「霜女覚え書」(全九章)を資料として「糸女覚え書」(全二十三章)を書き上げるために芥川龍之介が、成した資料改竄の足跡をこれから辿って行きたい。才色兼備、貞女の鑑と謳われた明智光秀の娘玉、細川忠興夫人(洗礼名ガラシヤ、諡号秀林院)の実像を暴露するという意図により創作された作品である。その意味では、「糸女覚え書」も他の芥川龍之介作品と同じく、三島由紀夫「『南京の基督』解説」(「手巾」)の発言が、当て嵌まる。

芥川の「将軍」その他、ほとんどあらゆる作品に見られる英雄否定、美談否定は、思想といふより趣味の問題で、当時の浅薄な時代思潮の反映である。

貞女の鏡とされる細川忠興夫人の実像を暴く行為は、先の作品「袈裟と盛遠」(「中央公論」大正七年四月)において独自の解釈を施したのと手法は同じである。第一には貞女の鑑と賞賛される夫人の実像を暴露する手法において「袈裟と盛遠」と同じくし、第二には細川ガラシヤ夫人の世に伝えられる信仰生活の虚像を暴くことである。

夫人は容顔美麗のため、他より恋慕せられ、又良人より嫉妬を受けた。然もその戒行の謹厳にして、断食の時間は、精密にその式を守った。而してあらゆる苦錬を励行した。且つ数多の捨て児を撫育すべく、これを邸内に収養し、手自ら衣服を著け、又これを沐浴せしめた。(中略)彼女はフレール・ワンサン師の贈る所の文典を得、やがてよく欧州人と異なることなく、拉丁、或いは葡萄牙の国語を書することが出来た。(「日本西教史」)

細川ガラシヤ夫人の信仰生活に加えられた容赦のない批判は、やがてそのまま芥川龍之介の晩年のキリスト教思想に対して直接的な痛みとなって撥ね返った。

前掲、三島由紀夫「『南京の基督』解説」(「トロツコ」)の発言を引用する。

芥川はジャンルとしての一つの型を意識せずには、作品の質を上げることのできなかつた作家である。保吉物の失敗は、型の意識のことさらな排除にあるのだ。

「霜女覚え書」(全九章)を典拠として「糸女覚え書」(全二十三章)への拡大の操作の過程に芥川龍之介の独創があるのであるが、その独創の多くは、細川ガラシヤ夫人の信仰生活の実態を即物的に暴露する事であった。「糸女覚え書」執筆により造形された軽薄な信仰者、細川ガラシヤ夫人の存在が、後年の芥川龍之介の信仰生活に影を投げかけた事については、死後に残された遺稿により明らかである。

僕は嘗かう書いた。－「全智全能の神の悲劇は神自身には自殺の出来ないことである。」恰も自殺の出来ることは僕等の幸福であるかのやうに！僕はこの苦しい三箇月の間に屢自殺に想到した。その度に又僕の言葉の冷かに僕を嘲るのを感じた。天に向つて吐いた唾は必ず面上に落ちなければならぬ。僕はこの一章を艸する時も、一心に神に念じてゐる。－「神の求め給ふ供物は砕けたる霊魂なり。神よ。汝は砕けたる悔いし心を軽しめ給はざるべし。(「二唾」大正十五年)

三島由紀夫の鋭い指摘を反芻すれば、芥川龍之介は「型を意識せずには、作品の質を上げることのできなかつた作家である。」、つまり典拠なくして芸術作品の完成を期すことの出来なかった作家である。「糸女覚え書」において見るべき箇所は、典拠「霜女覚え書」を逸脱した場面にある。かつて「手巾」(「中央公論」大正五年十月)を執筆した時に、作品構想に示唆を与えたのは、数ヶ月前に発表された久米正雄「母」(「新思潮」大正五年八月)である。今日、両作品を読み比べてみると作中人物の描き方、人物造形或は、物語中の色彩が同じである。芥川龍之介自身、後年影響を受けやすいのは自身の欠点であると自戒しているが、こうした傾向は初期作品から見られたのである。

「浮田中納言様の奥様は与一郎様と御姉妹の間がらゆゑ、」(「糸女覚え書」十)という意味不明の箇所は「芥川龍之介全集」(「筑摩書房」)まで、

すべての他の全集においても見られたが、最近の菊版「芥川龍之介全集」（「岩波書店」）では「浮田中納言様の奥様は与一郎様の奥様と御姉妹の間がらゆゑ、」と正しく訂正されている。

細川忠興から大阪、細川屋敷において細川ガラシヤの身柄を預けられたのは、小笠原小斎（秀清）、河北石見（一成）、稲富伊賀（裕直）の三人である。「稲富は其の時心変りを仕り、敵と一所になり申し候様子を少斎聞き、」（「霜女覚え書」）と記録されたように稲福伊賀のみ責任を放棄して戦場を離脱した。唯一生き延びたこの人物について「糸女覚え書」では、次のように紹介されている。「十四、この日は又河北石見、稲富伊賀（裕直）と口論致され候よし、伊賀は砲術の上手につき、他家にも弟子の衆少からず、何かと評判よろしく候まま、少斎石見などは嫉きことに思はれ、兎角口論も致され勝ちとのことに御座候。」「二十二、その時誰やら若き衆一人、萌葱糸の具足に大太刀を提げ、お次へ駈けつけ候や否や、稲富伊賀逆心仕り敵は裏門よりなだれ入り候間、（後略）」（「糸女覚え書」）、「霜女覚え書」の記載の一行を「糸女覚え書」では、大幅に増大させ人物像を鮮明にした。

主君細川忠興を裏切り、生き延びた人物について吉田精一篇「芥川龍之介全集」（「筑摩書房」）は、「糸女覚え書」頭注で次のように解説している。

「稲富伊賀（？～1611）直家とも。伊賀入道一夢斎と称した。稲富流砲術の祖。忠興に仕えたが、三成の人質を拒んで夫人が自刃し家臣もこれに殉じた際、脱走して身を完うしたため、忠興に悪まれ世を忍ぶ身となったが、その技を惜しんだ家康のとりなしによって再び世に出た。」

芥川龍之介「糸女覚え書」で紹介された、この転向の人物について後年松本清張は多大な興味を持ち「特技」（「新潮」昭和三十年五月）で描き、さらに「火の縄」（「講談社」昭和三十八年十二月）において主題を拡大して再創作した。松本清張の創作ノートには、早くから細川屋敷から逃亡して生き延びた稲富伊賀についての草案が、技術者の悲哀というテーマで記述されていた。松本清張が、「即ち稲富は表門（西の門）へ居り申し候。（中略）稲富は其の時心変りを仕り、敵と一所になり申し候様子を少斎聞き、」（「霜女覚え書」）から示唆を得たとは考え難い。「糸女覚え書」から示唆を得たと考えるのが、妥当であろう。

1

芥川龍之介が、細川ガラシヤ夫人の虚像を暴きその実態に迫る手法の一つは、欧州文化に同化する日本人の実態に迫ることであった。「彼女はフレール・ワンサン師の贈る所の文典を得、やがてよく欧州人と異なることなく、拉丁、或いは葡萄牙の国語を書することが出来た。」（「日本西教史」）と紹介されている彼女の語学力についての酷評である。

その後京の「ぐれごり屋」と申す伴天連へも何やら横文字のお書置きをなされ、これはわたくしへお渡し遊ばされ候。この横文字のお書置きは五六行には候へども、秀林院様のお書き遊ばされ候には一刻あまりもおかかりなされ候。（「糸女覚え書」十九）

「日本西教史」に記録された細川ガラシヤ夫人の外国語の記述能力など取るに足りないものであった、という芥川龍之介の容赦の無い指摘である。「日本西教史」の記述から容易にこの種の改竄を成しえるのは、芥川龍之介が党派に属しながら複眼的視線を持っていたからである。「新思潮」同人の中で、芥川龍之介のみが死後師の漱石に匹敵する名声を勝ち得たのは、生前の彼の派閥に安住する事を嫌う、仲間内の相互評価に身を任せる事の無かった性癖による。

日本国の女の智慧浅きは横文字の本を読まぬゆゑのよし、来世は必ず南蛮国の大名へお輿入れなさるべしと存じ上げ候。（「糸女覚え書」一）、秀林院様の「おらつしよ」は日本国の言葉にては無之、羅甸とやら申す南蛮国の言葉のよし、わたくしどもの耳には唯「のす、のす」と聞え候間、その可笑しさをこらふること、一かたならぬ苦しみに御座候。（「糸女覚え書」三）

南蛮諸国との最初の接触が生じた戦国末期に、南蛮かぶれになった秀林院は軽薄な存在として描写されているが、これは後年の外国文学研究者の原型である。半端な外国語の学習で自身を高みに置いて同胞を見下す存在は、開国時の通辞以来戦後の進駐軍の通訳、はては戦後の進歩的文化人に至るまで形を変えて何度も登場する。

2

才色兼備、貞女の鑑と後世称えられた細川忠興夫人の虚像を破壊する箇所は、党派の内部に安住し、佞臣を近づけ安易な精神生活に安んずる夫人の日常で描かれる。細川屋敷と大阪城両方に出入りする二股賭けた比丘尼の巧言令色は、細川忠興夫人の権力からの離脱を確認すると一変する。

「いつもお美しいことでおりやる。一定どこの殿御の目にも二十あまりに見えようず」(「糸女覚え書」二)、「御心痛のほどもさぞかしでおぢやらう。どうやらお顔も四十あまりに見ゆる」(「糸女覚え書」十三)

細川忠興夫人は、側近の激変振りに激怒して直ちにこれを身近から遠ざける処置を取った。さらに一層、信仰生活にのめり込む事になるのである。危機に際して合理的手段を講じる思考もその具体的政治的方策も持たず、祈祷の世界に埋没する典型的な愚人の姿を露見している。細川忠興夫人の悲劇は、第一義的にはその性格悲劇であり、第二義的には側近の無能により招来したものであり、迫り来る悲劇を避け難いと認識して思慮分別を失い、側近に当り散らすはしたない無分別な横顔を見せている。七年前に天草で版行された「伊曾保物語(全二巻)」(「キリシタン版ローマ字綴り口語文」)を愛読し、側近を下等動物に例えて嫌われる場面もある。

殊にわたくしは蝸牛にも、鴉にも、豚にも、亀の子にも、棕櫚にも、犬にも、蝮にも、野牛にも、病人にも似かよひ候よし、くやしきお小言を蒙り候こと、末代迄も忘れ難く候。(「糸女覚」九)

細川忠興夫人のこうした唯我独尊の、側近に対する気配りの欠如は、後で問題視するがキリスト者が、頻繁に陥りやすい陥穽の側面である。さらに貞女の鏡と称えられた夫人の実態は、突入して来た若侍の凛々しい姿に性的興奮を隠さないはしたない女であった。

秀林院様は右のおん手にお髪をきりきりと巻き上げられ、御覚悟の体に見上げ候へども、若き衆の姿を御覧遊ばされ、羞しと思召され候や、忽ちおん顔を耳の根迄赤あかとお染め遊ばされ候。(「糸女覚え書」二十二)

キリストに帰依した細川忠興夫人の言動で際立っているのは、「糸女覚え書」に即して言えば他者に対して高みから見下す典型的なキリスト者の負の側面を見せている事である。細川忠隆(細川忠興長男)の夫人が、加賀前田家の姫で浮田秀家(浮田中納言)夫人と姉妹であり、細川屋敷から脱走したことで罵声を浴びせる場面がある。

生まれては山崎の合戦に太閤殿下と天下を争はれし惟任将軍光秀を父とたのみ、死しては「はらいそ」におはします「まりや」様を母とたのまんわれらに、末期の恥辱を与へ候こと、かへすがへすも奇怪なる平大名の娘と仰せられ候。その節のおんありさまのはしたなさ、今も目に見ゆる心地致し候。(「糸女覚え書」二十)

義理の母にある細川忠興夫人は、長男の嫁に対して第一義には、前田利家と明智光秀の序列を論じ、自らの出自を誇り、第二義的にはキリスト者として死後の栄光を他者の前に誇っているのである。

細川忠興夫人の悲劇は、何故生じたか。作者芥川龍之介は次のように明快にその理由を述べている。作者によれば細川ガラシヤの悲劇は、自らの性格悲劇である。

第一にはお留守居役の無分別よりことを破り、第二には又秀林院様御自身のお気性より御最期を早められ候も同然の儀に御座候。(「糸女覚え書」十七)

作中、糸女により冷笑される細川忠興夫人の口上(「糸女覚え書」二十二)は、客観的に見れば、天下の覇権を争った明智光秀の娘玉としての自己確認の口上であり、キリスト者としての選民意識を明瞭に示した場面である。加賀前田家を出自とする義理の娘に対して「平大名の娘」との侮蔑の言葉は僭越であるが、翻って考えれば、前田利家は一度も中原に覇を争った事は無く、終始二流の人として生涯を終わった。織田、豊臣、徳川三代に渡り保身に終始したその出処進退振りで、加賀前田百万石は、その身代を守り通したと言える。細川ガラシヤ夫人の悲劇、その性格悲劇は自らの出自に由来する。

いち早く細川屋敷から逃亡して難を避けた、細川忠隆夫人もその姉妹は、浮田秀家夫人であり、関が原以後半世紀の年月を流人の妻として余生を送る事になるのである。人間運命の不思議は、余

人には理解し難い謎を内に秘めていると言える。

「天下の大名・小名のほとんどは途方に暮れ、ある者は東軍に投ぜんと欲して西軍に支えられて止むを得ず西軍に詭髄した者もあり、西軍に投ぜんとして東軍に余儀なくせられ東軍に与した者もあつた。」（徳富蘇峰「近世日本国民史徳川家康（一）序文」）

徳富蘇峰のこの「序文」が、明瞭に当時の置かれた武人達の運命を端的に語っているであろう。

3

河泰厚「芥川龍之介の基督教思想」（第五章「糸女覚え書」）は、以下の「日本西教史」を引用し、この箇所を典拠とする「糸女覚え書」（十八）を併記して日本人キリスト者の実態を明らかにしている。

汝等神仏法教を奉じ以て死を致せば、決して天堂に到り、天主を拝することを得ず、万世不滅の罪人たるを免がれざればなり、汝等速に我が侯の命を遂ぐべし、我が身は速かに天堂に到らんと欲す。（「日本西教史」）

その方どもは心得悪しく、切支丹の御宗門にも帰依し奉らず候まま、未来は「いんへるの」と申す地獄に堕ち、悪魔の餌食とも成り果て候べし。就いては今日より心を改め、天主のおん教へを守らせ候へ。もし又さもなく候はば、みなみな生害の伴を仕り、われらと共に穢土を去り候へ。（「糸女覚え書」十八）

封建時代では、君主の改宗は臣下の改宗に直結する。切支丹宗門の組織体内部では、生存のための改宗、自己保全のための改宗もあり得る。映画「ホロコースト」では、生存のため止むを得ずナチス党員になった男が、党内の出世のために過激な反ユダヤ主義者になっていく姿を描いた。映画「良き人のためのソナタ」は、東ドイツの共産主義社会から逸脱する共産党員の悲劇である。

前掲、河泰厚（第五章「糸女覚え書」）が、ここで問題にしているのは以下の二点である。第一はキリスト者の排他的独善である。自らを精神的高みに置いて、他者を見下す独善的態度、自惚れと過剰な自信で自らの姿が見えなくなり、夜郎自大になった組織内に安住する人間の悲劇である。

就いては今日より心を改め、天主のおん教へを守らせ候へ。もし又さもなく候はば、みなみな生害の伴を仕り、われらと共に穢土を去り候へ。（中略）然ればわたくしどもは感涙に咽び、みなみな即座に切支丹の御宗門に帰依し奉る旨、同音に申し上げ候間、（「糸女覚え書」十八）

封建時代に君主から、生か死か、と問い詰められ改宗を迫られて自由意志で拒否できる臣下はいない。こうした細川ガラシヤを描く作者は、組織内に安住する人間の悲劇に迫っている。一つの宗門、政治結社に属した時、混沌たる社会は鮮やかな色彩で明瞭に認識でき、自らが属する世界とその認識が正義であり、他者は憎むべき、排除すべき存在に変貌する。この瞬間、個人は永遠に存在、認識の不安から開放され幸福の予兆は、肉体と精神の全体を包むのである。

又お叱りなさるる度に「えそぽ物語」とやらをお読み聞かせ下され、誰はこの蛙、彼はこの狼などと仰せられ候間、みなみな人質に参るよりも難渋なる思ひを致し候。（「糸女覚え書」九）

選ばれた選民意識で、周辺の人物を動植物に例えて批評、罵倒する細川忠興夫人の言動は、一つの宗教、一つの政治集団に属して心の平安、人生の指標を得た者の典型である。人生の日々の一刻、一刻は不安と未知の世界に満ちている。この不可解な人生のすべての謎を解決してくれる宗教、政治集団は、孤立する個人に確信と自信とを与える秘鑰である。一つの党派に属した瞬間、人生の全ては鮮やかな色彩で敵と味方、善と悪とに峻別される。自分が属する党派こそ神の恩寵であり、周辺は殲滅しなくてはならない悪魔の巣窟である。

自殺するか、洗礼を受けるか、それとも党に入党しようかと追い詰められ決断の一線を超えた瞬間、その言動は鮮烈、熾烈を極め、無能な老人と雖も神の代理人として世人に君臨する事になる。組織としての宗教、特殊な政治結社は、現世におけるこの種の実行力で今日も尽きせぬ魅力を我々に投げかけている。細川忠興夫人も切支丹宗門に帰依した瞬間、こうした矛盾を人間として抱え込む事になったのである。

長谷川郁美氏は、「糸女覚え書」の作品全体の意味を、夫人の機嫌が悪いたびに口に出す「えそぽ物語」に照射して解釈する。（中略）「糸女覚え書」は侍女の「糸女」の目に映された主人の言行を暴露するもう一つの「えそぽ物

語」になる。その暴露には必ず滑稽を伴わざるを得ず、その暴露性によって「糸女覚え書」は滑稽化されるのである。(河泰厚「糸女覚え書」一)

この指摘により「糸女覚え書」に込められた作者の鋭い揶揄、風刺の側面について二つの側面がある事を知る事が出来る。切支丹に帰依する事で精神の高みから、洗礼を受ける事のない侍女たちを動植物に例えて嘲笑する細川忠興夫人、この夫人を嘲笑する別の視線、糸女の存在の意義である。「糸女覚え書」の典拠「霜女覚え書」の語り手である霜女は、「糸女覚え書」に何度か登場している。作者は、「糸女覚え書」の典拠が「霜女覚え書」であることを読者に対して明瞭に示すと同時に、糸女という第三者の視点を設定することで、衆生を嘲笑する細川忠興夫人をさらに別の視点から嘲笑しているのである。

なほ又秀林院様は三斎様与一郎様へお書置きをなされ、二通とも霜へお渡し遊ばされ候。その後京の「ぐれごり屋」と申す伴天連へも何やら横文字のお書置きをなされ、これはわたくしへお渡し遊ばされ候。(「糸女覚え書」十九)

作者が、細川忠興夫人を嘲笑する視点は、神の恩寵に無縁な衆生を動植物に例える「えそぽ物語」の援用を逆手にとって糸女の視点で、さらに高貴な細川忠興夫人を嘲笑していることである。上記の目的を完璧ならしめるために、作者は厳粛なるべき夫人の自刃を執り行うべき付き人を「えそぽ物語」の衣装を借りる事で滑稽な存在に仕立てている。

「少斎は唯律儀なる老人、石見は武道一偏のわやく人に候間、」(「糸女覚え書」六)「生憎少斎は抜け歯を煩はれ居り候まま、」(「糸女覚え書」十六)「少斎はお次に両手をつかれ、御最期の時参り候と申し上げ候。尤も片頬腫れ上られ居り候へば、言舌も甚ださだかならず、秀林院様にも御当惑遊ばされ、大声に申候へと御意なされ候。」(「糸女覚え書」二十一)

厳粛、峻烈な細川忠興夫人の自決の場を嘲笑する芥川龍之介の意図は、以上で明白である。

4

典拠「霜女覚え書」のほとんどは、「糸女覚え書」に収斂されている。分量的に後者は、前者の二倍以上の分量を誇り、装飾部分に芥川龍之介の文学的意義がある。内容的には細川忠興夫人の理想像を破壊し、その人格の矮小化を成すことであり、作品構成上は、「えそぽ物語」の寓話を使って供の者を見下す形式を取っている。この夫人の立場は、架空の侍女糸女によって、冷笑されるという二重構造を持っている。「近世日本国民史」(「徳川家康」一)に記録された細川忠興夫人の最期は次のようなものである。

護衛兵が、夫人の室に近づくや、夫人は神色自若として、基督及び馬利亜の名号を唱え、衣襟を開き、首を延べて創手に任せた。護衛長官は、敬礼の後、刀を抜いてこれを介錯し、絹辱もて、その亡骸を覆い、上に火薬を散乱し、この室に自殺するは憚りありとて、他室に赴き割腹し、その一人存在して火を放った。(「日本西教史」)

記録された細川忠興夫人は、行為において躊躇いを見せる事のない典型的な武人の妻である。「ときは今あめが下知る五月哉」の発句で重大決心を披露した後、何度も躊躇いを見せた父の惟任日向守より、行為の後に心を残さなかった。最終的に自滅を覚悟で、天下に覇権を称えるために謀反の決断を果敢に成した父の血は、確かに娘に伝わっていたと言える。

秀林院様は右のおん手にお髪をきりきりと巻き上げられ、御覚悟の体に見上げ候へども、若き衆の姿を御覧遊ばされ、羞しと思召され候や、忽ちおん顔を耳の根迄赤あかとお染め遊ばされ候。(「糸女覚え書」二十二)

果敢な行為により身を処する細川忠興夫人の最期を粉飾する、「糸女覚え書」での夫人の矮小化は、芥川龍之介の文学的手法としてその装飾的手法は、効果があったと言えるだろうか。この種の資料改竄は、時として作者自身の個性の矮小化を示す事になり得る危険な要素を持っている。芥川龍之介の日頃からの典拠離れ、資料改竄の手法は時として親しい友人をも閉口させている。

「僕はこの悪文を作りながら、甲斐の駒ケ嶽に下りた雪やもう散りかかつた紅葉と一しょに夢子を伴つた数年前の宇野浩二君を思ひ出してゐる。」(「『我が日我が夢』の序」昭和二年五月七日)

後年宇野浩二は、死の直前のこの文章に対して、

その事実の粉飾振りに対して「話にもなにもならぬのである。」（「芥川龍之介」上巻、三）と当事者として不満を漏らしている。

「糸女覚え書」には、細川忠興夫人の発言により「おぎん」（「中央公論」大正十一年九月）で扱われた主題、棄教の問題が再浮上してきている。

> その方どもは心得悪しく、切支丹の御宗門にも帰依し奉らず候まま、未来は「いんへるの」と申す地獄に堕ち、悪魔の餌食とも成り果て候べし。就いては今日より心を改め、天主のおん教へを守らせ候へ。（「糸女覚え書」十八）

天国か、地獄かという二者択一の選択を与えられて、否定する者は即、地獄にという過激な言動が多くのキリスト者を躓かせて来た事実を想起すべきである。ここで仏教徒として地獄に落ちている父母の霊魂との再会が叶わぬならば、天国よりは地獄に行きたいと呟いたならば、「おぎん」の主題に重なる事になるのである。

むすび

典拠「霜女覚え書」の細川忠興夫人は、惟任日向守の娘として決然として死地に就く武人の妻であった。「御髪を御手づから上えきりきりと御巻上げさせ給へば（中略）心得たりと御胸の所を、くわつと御押開きなされ候。」（「藩譜採要」）、これに反して「糸女覚え書」は、切支丹宗門に帰依する事で排他的独善により侍女を動物に例えて安住する、イデオロギーで汚染された典型的な類型を示している。組織内に安住する事で、精神の高みから周辺を見下ろす事で、自己の存在を客観的に冷静に観察している部外者の存在に気付く事のない愚かな細川忠興夫人を描いている。

宗教、政治党派、いずれもその組織に安住した瞬間、自己の行動、思考を客観的に直視する視線を失う。「切支丹の御宗門にも帰依し奉らず候まま、未来は『いんへるの』と申す地獄に堕ち、悪魔の餌食とも成り果て候べし。」（「糸女覚え書」十八）、この細川忠興夫人の発言は、組織内に魂を委ねた者の排他的独善、高慢を今日に警告している。組織としての宗教、政治集団は、つねにこの種の危険に身を曝している。組織内では、自己の悪も、仲間の悪も許しあい、外部に対してはいかなる瑕瑾も容赦しない。「糸女覚え書」で芥川龍之介により再生された細川忠興夫人は、典拠「霜女覚え書」を離れ、切支丹宗徒として特殊宗教集団に属した者の宗教的狂信、排他的独善、或は行為において躊躇う事の無い勇気ある戦国武将の夫人の横顔を見せている。